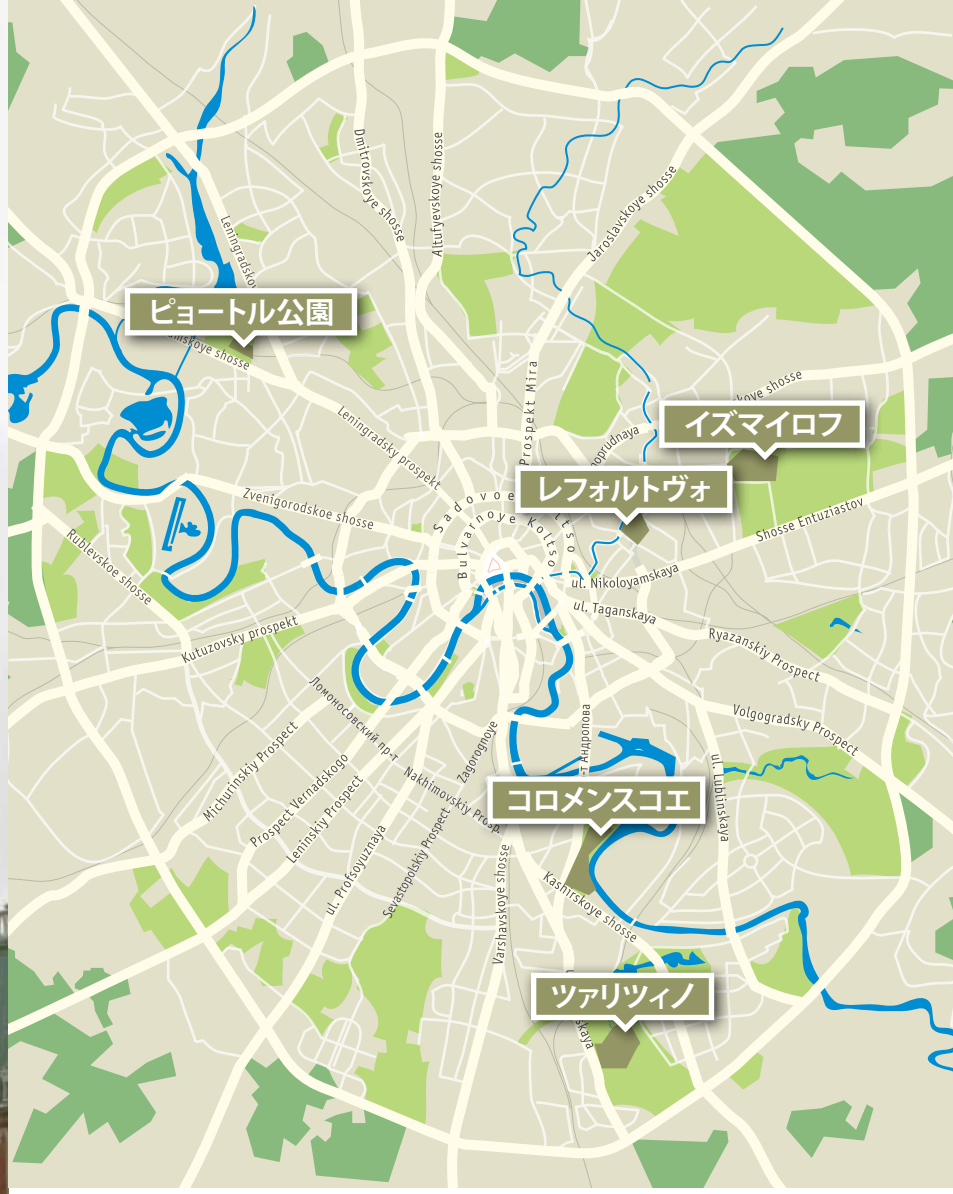
モスクワの公園と屋敷

皇帝の不動産	2
旧モスクワ郊外の屋敷	26
公園	46
庭園	58
動物園	66
自然保護区	68
補足情報	70

皇帝の不動産

コロメンスコエ、イズマイロフ、レフォルトヴォ、ピョートル公園、ツァリツィノ



ロシアの皇帝は、モスクワのクレムリンに住んでいましたが、郊外にも土地がありました。外国からの使者に確かな印象を与えるために、邸宅は可能な限り豪華になるように努めました。以来、モスクワは土地が広がり、それらの郊外の土地も、中心的なモスクワの一部となりました。古い建築物はそれほど多くは残っていませんが、現在でも見れることから、訪れた人々はロシアの統治者の生活の様子、日常、性格なども感じとれることでしょう。これらの場所にある博物館は、誰にとっても興味深い、詳細な情報にあふれているのです。

国立「コロメンスコエ」博物館・自然公園

ここは、14世紀の皇居として有名です。「コロメンスコエ」については、実際のできごとや架空のできごとにもとづいた、多くの伝説があるほど、人々をひきつけます。
現代の「コロメンスコエ」の敷地は250ヘクタール以上あり、50ほどの建築的、自然的、考古学的記念物のある、モスクワ郊外の旧村、コロメンスコエとディヤコフが入っています。その他にも、博物館、教会、古い建築、コルモオヴォイ宮殿とフレブノイ宮殿の基礎部や博物館となっている基礎部、ディヤコフの防塞集落趾、リンゴ園、樹齢500年以上のオーク、湧泉群「カドチカ」、変わった形の石、野外木造建築博物館など、さまざまなものがあります。この野外博物館には、さまざまな場所から移築された建築物が立っています。
ここでは多くのフェスティバルやさまざまな行事が開催されています。例えば、5月1日から9月30日までの期間、毎日砂の彫刻見本市（art-pesok.ru）が開催されている他、夏には17世紀を再現するフェスティバル「時間と時代」（в р е м е н а и э п о х и.р ф）が行われ、歴史的な雰囲気に包まれます。その他、モスクワ市創設記念日や、その他の祝日も祝われます。博物館ではさまざまな企画展も開催され、ガイドも行われています。この敷地内には埠頭があり、そこから快適な船に乗ってちょっとしたリバー・クルーズを楽しむことがで

きます。
毎週末には、さまざまな大きさの金属板が、木枠の中に並べられた一風変わった楽器、ビラの音を聴くことも可能です。ひとりまたは複数の音楽家が「コロメンスコエ」でビラを演奏すると、不思議な夢のような鐘の音が空気中に伝わり、胸が喜びとハーモニーに満たされるのです。この楽器についての詳細な説明や、生みの親であるアレクサンドル・ジハレフに関する話は、bila.dxi.ruのサイトに記されています。
歴史上さまざまなできごとがあった、この趣ある場所に関する秘密が、多くの人々を引き寄せます。研究者は考古学的発掘を行い、2500年前からここに人が住んでいたことを突き止めました。ディヤコフ村の領域では、考古学的文化の名前のもとにもなった、ディヤコフ防塞集落趾が発見されました。石器時代（紀元前5000年から3000年）の発掘物もあります。ここには中世（8〜10世紀）と11〜12世紀にも人が暮らしていました。発掘調査により、このようなことがわかっているのです。
書物に「コロメンスコエ」のことが記されたのは、イヴァン1世ダニーロヴィチが統治していた時代の14世紀です。ドミートリー・ドンスコイ軍が、1380年のクリコヴォの戦いに勝利した後、ここに来たことは有名な話です。
ウラジーミルとモスクワの大公、ヴァシリー3世が統治を行っていた時代の1528年から1532年にかけて、主の昇天教会が建設されました。ヴァシリー3世の最初の妻だったソロモニヤ・サブーロヴァ妃とは、子宝にめぐまれなかったため、2番目の妻のエレナ・グリンスカヤ妃との間に後継者が生まれるよう、願いを込めてこの教会を建設したようです。ただ、非常に複雑な構造により、建築に4年を要したため、1530年には息子のイヴァン（未来のイヴァン雷帝）が生まれ、1532年にはこの教会で洗礼も受けており、完成した時には当初の建設目的はすでに消えていたようです。

この教会は特別な建築物で、他のロシアの教会建築に似たものはなく、ユネスコ世界遺産に登録されたのも納得です。現在は閉鎖されていますが、下階は博物館となっています。ここから、16世紀に建設された、洗礼者ヨアン・プレテチャ斬首教会がよく見えます。同時代に建てられた、有名な赤の広場のポクロフスキー大聖堂（または聖ワシリイ大聖堂）と同じ、支柱の

たくさんあるめずらしい様式になっています。
イヴァン雷帝の死とともに、ロシア史の苦難の時期となる動乱時代が始まり、「コロメンスコエ」は異なるできごとと関連する場所になりました。1606年、農民蜂起の首長イワン・ボロトニコフが、自分の軍とともにここを訪れ、1610年には偽ドミトリー2世がここに来ました。
動乱時代の終焉と、ロマノフ王朝の始まりは、ロシア史に新たなページを刻み、「コロメンスコエ」の整備にも良い影響を与えました。ロマノフ王朝の最初の皇帝であるミハイル・フョードロヴィチ皇帝時代の1630年、カザンの聖母聖堂が起工し、その息子のアレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝の時代である1649年から1653年に、石造りに改築されました。アレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝は、カザンの聖母聖堂のわきに、木造の宮殿と聖堂との屋内通路を建設するなど、「コロメンスコエ」を繁栄させました。この宮殿はエカチェリーナ2世の時代に、老朽化により取り壊されたため、現在は残っていませんが、ディヤコフ村の跡地には同じ大きさの模型が建てられ、内部が博物館となっているので、それを見て、皇帝家族の生活を感じることができます。
この宮殿に関連した、その他のアレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝時代の建築の一部となる、前後の門や、命令の間、陸軍大佐の間などは残っていて、前門の建物には、「コロメンスコエ」の歴史を物語る展示品があります。汲水塔では、最初の給水管が作られた経緯やメカニズムについて知ることができるようになっています。人々が自分の願いや、皇帝への不満をぶつけた嘆願台も残っています。敷地内のすべての物に、興味深い説明書きが設置されています。
アレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝の息子であるピョートル1世は、「コロメンスコエ」で生まれ、子供時代をここで過ごしました。アルハンゲリスクからピョートル1世の家がここに移築されていますが、ピョートル1世は新しい都をつくったために、ここではいかなる建築も行いませんでした。
エカチェリーナ2世は、アレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝の宮殿を解体し、昇天教会の近くに新しい宮殿を造るよう命令し

ました。その宮殿は1812年の祖国戦争の際に崩壊し、その後にその基礎部にアレクサンドル1世の命令により建設された建物と同様、現在ではその姿をみることができませんが、小さな東屋があります。「コロメンスコエ」の建築物は、主に16〜17世紀の物となっています。
1923年、「コロメンスコエ」に残っていた歴史的な建築群を野外博物館に変えたため、モスクワでもっとも人気の高い場所のひとつとなりました。

イズマイロフ公園

モスクワ最大規模の緑地と文化・休息公園をひとつにしたイズマイロフ公園は、モスクワ有数の多目的公園です。本物の自然を堪能することができ、スキー場、自転車やローラースケートのレンタル、射的場、スポーツ施設などを利用して、さまざまな遊びを楽しむこともできます。児童用には遊技施設、園内を走るミニ蒸気機関車、馬があり、さらに少し年齢が上の子供用にアトラクションもあります。この場所は、イヴァン雷帝の最初の妻である、アナスタシア・ロマノヴナ・ザハリイナ・ユリエワなどの親戚である、ロマノフ家やザハリイン・ユリエフ家の世襲領地として有名なため、17～18世紀の建築物を見ることができ、歴史愛好家などは十分に楽しむことができます。この土地を引き継いだのは、アナスタシア・ロマノヴナの弟であるニキータ・ロマノヴィチです。イヴァン雷帝の死後にボリス・ゴドゥノフの統治が始まった時、ニキータ・ロマノヴィチ

の子供たちは王位継承を要求する可能性があるとして、新たな皇帝の不振を買いましたが、後に妻と剃髪され、修道院に流されたフョードル・ニキーチチ（その後総主教になり、フョードルの息子のミハイル・フョードロヴィチはロマノフ王朝最初の皇帝になりました）と、イズマイロフの領主となったイヴァン・ニキーチチのみが迫害を受けました。
動乱時代が終了すると、イヴァン・ニキーチチにこの土地を整

備し、拡大できる可能性が生まれ、イヴァン・ニキーチチの息子であるニキータ・イヴァノヴィチ・ロマノフが父の活動を引き継ぎました。ニキータ・イヴァノヴィチは、ここや、犬の訓練用に野生動物（オオカミ、キツネ、クマ）を放していた「オオカミ園」で狩猟業をで始めました。
ニキータ・イヴァノヴィチは優しい人物だったため、まわりの人に好かれていましたが、外国の物にひきつけられるという、当時としては珍しい特徴があり、ヨーロッパ風の服を着て、使用人には制服を着せ、宗教本を読み、珍品を家に置いていました。もっとも変わった物は「聖ニコライ」船（小型帆船）で、イギリスの商人からの贈り物だった可能性もあります。
ニキータ・イヴァノヴィチには子供がいなかったため、死後（アレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝の統治時代）はすべての所有物が大宮殿庁に引き渡されました。
アレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝はこの土地に、試験農場や農園をつくり、ブドウ、スイカ、メロン、綿花、アーモンド、ピーマンなど、ルーシで価値の高かった物すべてを栽培していました。アレクセイ・ミハイロヴィッチ皇帝の息子のピョートル1世は、ニキータ・イヴァノヴィチの古い小型帆船を見つけ、その船で航海に出かけました。「聖ニコライ」船は、「ロシア艦隊のおじいさん」と呼ばれることになります。古い小型帆船とイズマイロフの土地の影響で、ピョートル1世はニキータ・イヴァノヴィチからヨーロッパの伝統への関心を受け継

いだのかもしれません。
一人の君主時代に繁栄した邸宅が、他の君主時代に放置されるということがありますが、イズマイロフも例外ではなく、世代が変わり、時代が変わり、サンクトペテルブルクに遷都し、皇帝の家族はやがてこの場所に住むことを止めました。イズマイロフに住んだ最後の人物となったのは、アンナ・ヨアノヴナで、子供時代をここで過ごし、皇帝になった後はしばしば訪れていました。
ニコライ1世の時代、イズマイロフには老兵用の老人養護施設があり、1918年まで残っていました。ここに残っている歴史的建築物には、橋があった場所に位置する小城橋塔（1671～1679）、ポクロフスキー大聖堂（1671～1679）、表門と裏門（1679～1682）、鋳鉄製の門と噴水、19世紀のニコラエフ・イズマイロフ軍擁護施設の石造りの建築物などがあります。
現在イズマイロフは、散歩をしたり、楽しい時間を過ごしたりすることのできる場所で、老若男女をひきつける、現代的で整備された公園になっています。

宮殿・公園アンサンブル「レフォルトヴォ」

この場所は世襲領地ではありませんが、ピョートル1世と関係があります。モスクワ東部には、ピョートル1世と関連性のある名称が多く残っています。例えば、地下鉄のセミョーノフスク駅やプレオブラジェンスク地区は、セミョーノフスク隊員やプレオブラジェンスク隊員と関係があります。ポテシュナヤ通りや、若き君主の軍団に最初に登録したセルゲイ・レンチエヴィッチ・ブフヴォストフのブフヴォストフ通りなどもあります。ブフヴォストフはピョートル1世のすべての遠征に参加し、最後には将校の名を手に入れました。現在、地下鉄のプレオブラジェンスク広場駅のわきには、ブフヴォストフ像があります。

イズマイロフ地区はピョートル1世の子供時代に関連があり、「レフォルトヴォ」は、ここに暮らしていた、ピョートル1世の盟友フランツ・レフォルトと関係があります。ピョートル1世は大きなグループを連れて客人としてここをよく訪れていたため、これが国の資金でこの家に大広間を増築し、石作りの宮殿を建てる理由のひとつとなった可能性があります。フランツ・レフォルトは新しい宮殿に引っ越して間もなく亡くなったため、その後ピョートル1世が使用しました。

モスクワのこの地域の宮殿は、多くの名家の人、皇族、アンナ・ヨアノヴナ、エカチェリーナ2世、パーヴェル1世などが自分たちが使用するために建設したものです。さらにピョートル1世の盟友フョードル・ゴロヴィンの土地だったゴロヴィン庭園は、アンナ・ヨアノヴナが「ヤウザのヴェルサイユ宮殿」と呼んでいましたが、現在でも最初の設計要素を見ることができます。

レフォルト宮殿、スロボダ宮殿、エカチェリーナ宮殿など、いくつかの宮殿は現在まで残っています。ゴロヴィン公園は、現在、コロメンスコエ、イズマイロフ、リュブリノと同様、モスクワ国立博物館・自然公園の一部となっています。

国立歴史・建築・芸術・風景・博物館・自然公園「ツァリツィノ」

多くの場合、皇族や貴族は、戦争で活躍したり、皇帝や国への忠誠心を示した先祖から、土地を相続しているため、君主があえて自分で土地を選ぶという珍しいケースは関心を引きます。こういった個人の選択では、その人自身を多く物語り、それがエカチェリーナ2世のような存在感があり、他の人とは違う人物だと、ますます土地の魅力は増します。
エカチェリーナ2世は1775年を、「コロメンスコエ」など、モスクワで暮らしました。これはかなり批判されました。
当時の流行を考えると、実際に「コロメンスコエ」はエカチェリーナ2世の好みに当てはまる場所ではなかったため、「コロメンスコエ」の隣のチョルナヤ・グリャジ（黒い汚れ）という名前の村の美しい自然を見て、そこに本物の皇居らしい自分の邸宅を建てようと決心しました。なぜこの場所にそんなに引き付けられたのでしょうか。恐らく、池、草地、林など、公園（当時は「コロメンスコエ」のように庭園と菜園でしたが）を整備できる条件がそろっていることを感じとったからでしょう。エカチェリーナ2世はロシア人ではなく、ヨーロッパ出身者だったため、すべてをヨーロッパ的なセンスに合わせようと努力し、自分でもそれを維持していました。
この場所について、エカチェリーナ2世はこのように手紙に書

いています。「広い林にかこまれた河畔と、お供と船で小川を渡る陛下を想像してみてください。その前には茂みで覆われた低地があって、そこにはキジ、

鳥かご、堰き止めのある池、秋の背の高いヤナギがあり、そのヤナギをかきわけると大きな池が現れて、一方の広い岸辺には小さな木々が散らばり、他方の

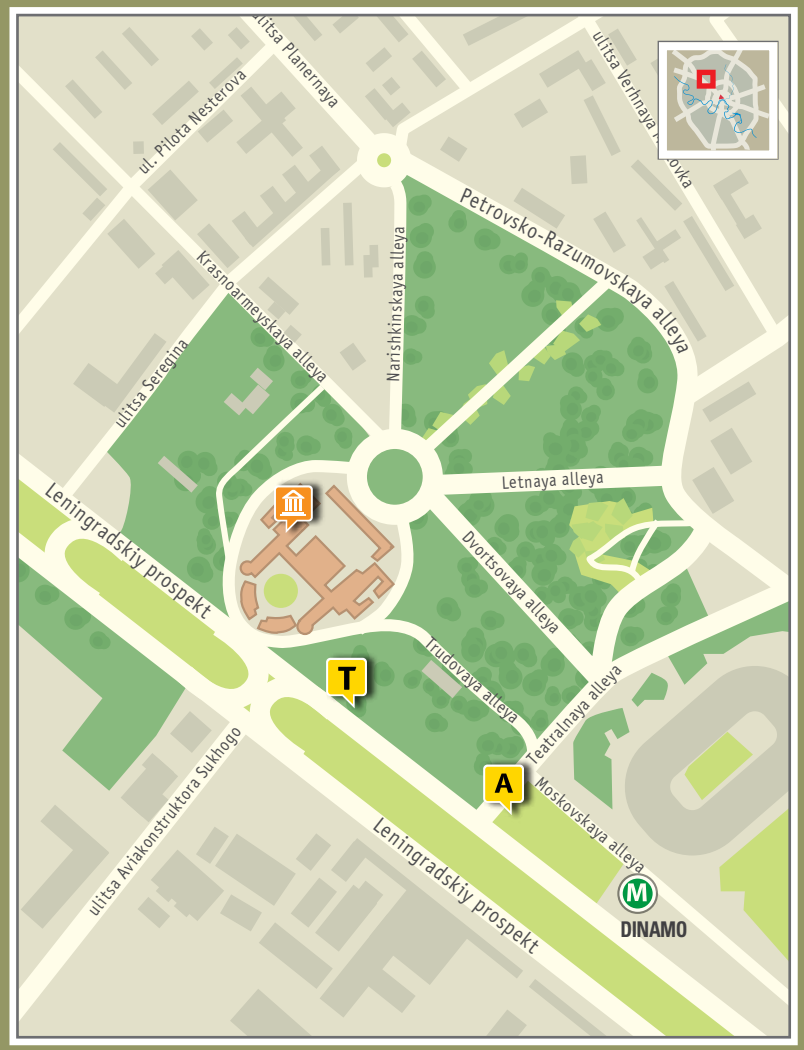
緩やかな傾斜のある岸辺には野原、草地、林、そしてポツポツと生える木々があり、いかだの左側には林におおわれた水藻の繁茂した細流あって、円形劇場のように高く周囲が広がって行くのです。これをすべて想像してみてください。そして、誰も興味のないコロメンスコエと全然違う、ツァリツィノに来てください」。ここを訪れた人々は、実際にこの記述にある場所がどこかを当てることができます。わずか2週間で簡単な木造建築を完成させ、エカチェリーナ2世は引っ越してきました。建築を任された、優れた建築家のV.I.バジェノフは、1775年から1785年までの10年間でツァリツィノの建設工事を完了し、チョルナヤ・グリャジ（黒い汚れ）と呼ばれた場所を豪華な宮殿の土地に変えましたが、完成した宮殿はエカチェリーナ2世のお気に召さず、改築ではなく、解体するように命じました。実際には、宮殿ではなく、バジェノフに不満があったようです。歴史学者はさまざまな原因を推測していますが、バジェノフの器量の悪さが問題というのが、原因のひとつ、または原因をまとめた結論になっています。バジェノフに対する罰は厳しく、1年間建築家としての活動ができなくなり、さらにバジェノフの弟子のM.F.カザコフに師匠の宮殿を解体し、新しい宮殿を建設するように命令しました。カザコフの当初の設計は、資金不足により、いくつも変更点が加えられました。カザコフの宮殿の建設にはさらに10年かかり、1794年に外装が完成しましたが、その時にはすでにエカチェリーナ2世のこの場所に関する関心は失われていたようです。

内装を完成を見ることなくエカチェリーナ2世は他界し、次のパーヴェル1世はその工事を続けなかったため、放置された建物は使われることなく廃墟となりました。後世の一部には、この宮殿はあまり気に入られていませんでした。「8本の高い塔のある宮殿の建物は、ロウソクを手にして立っている大きな修道士に囲まれた、祭壇に置かれた大きな棺のようです」と、有名な旧モスクワ調査者のM.I.プィリャエフは表現しています。宮殿は2000年代に入ってから改装されたので、今はプィリャエフの表現は当てはまらないでしょう。

バジェノフの他の建築物として、宮殿、橋、門などが現在でも残っています。
この場所には実際に、池、林、野原、また現在は階段が設置されている大きな坂など、エカチェリーナ2世を感動させた自然も忘れることはできません。ツァリツィノの特徴として、リンゴ園の花が咲く春と、坂の林が黄金色になり、カエデの葉にさまざまな模様が現れる秋が美しいことがあげられます。

国立歴史・建築・芸術・風景・博物館・自然公園「ツァリツィノ」は、モスクワを訪れる人々や、この街の住人に大変な人気があります。絵のように美しくロマンチックなこの場所に、I.S.ツルゲーネフやI.A.ブーニンは主人公を登場させましたし、ウィルキー・コリンズの長編小説を映画化した「白衣の女」の撮影にも使われました。ロシアのゴシック様式（擬ゴシック様式）はロマンチックなため、ここで多くの結婚式を見ることができるのです。

ピョートル公園

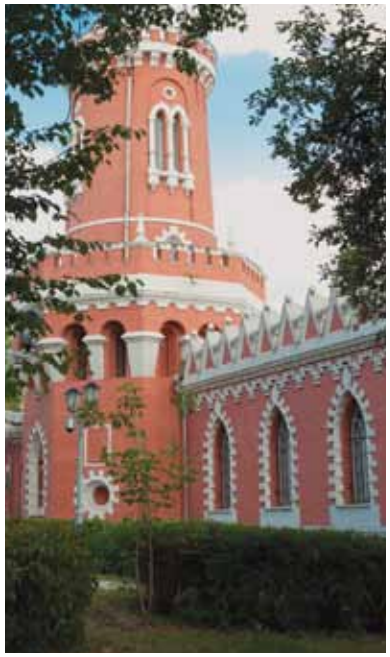


ピョートル旅行宮殿の周囲の小さな緑地は、かつてここにあったピョートル公園のほんの一部でしかありません。19世紀に壊された公園には、現在「ディナモ」スタジアムのある場所なども含め、大変広い敷地がありましたが、まず宮殿についてご案内します。

この宮殿は、モスクワでもっとも有名な建築物のひとつです。旅行宮殿は、皇族がサンクトペテルブルクからモスクワに行く際、立ち寄って休息をとり、クレムリンへの華麗な登場のための準備を行った場所です。エカチェリーナ2世は、ツァリツィノの場所を取得した1775年、高ピョートル修道院の敷地にあるトヴェリ関所の裏に、露土戦争の勝利の記念物として、地下宮殿を建てるよう命令しました。建設はM.F.カザコフに依頼し、7年を要しました。この独特な建築物は、ゴシック様式とトルコ様式がひとつになっています。

エカチェリーナ2世が初めてここに寄ったのは、1787年のことでした。ピョートル1世は戴冠式の前にここを訪れました。ナポレオンが、1812年にロシア帝国へ侵攻した際、モスクワの大火災から逃れるために、9月16日から9月18日までこの宮殿に滞在しました。

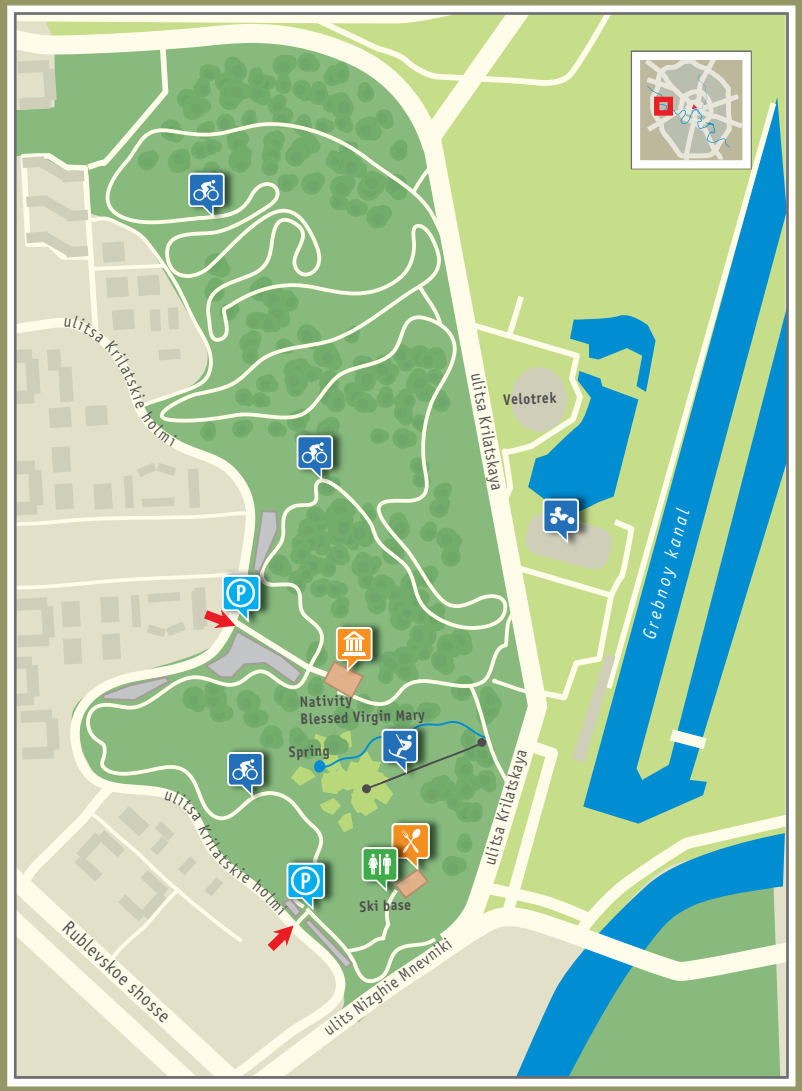
オークに囲まれた
ピョートル宮殿陰うつで
最近は栄誉を誇る
無駄に待ったナポレオン



最後の幸福に陶酔し
モスクワはひざまずく
古いクレムリンの鍵で
いや、私のモスクワは行って
ない
罪ある頭でそこには
祝日も受け入れる贈り物もなく
モスクワは火事を用意
短気な英雄に
ここから、思いにふけり
恐ろしい炎を彼は見た
A.S.プーシキンは、この部分
で、ロシア史の劇的なページの
1枚を正しく表現しました。

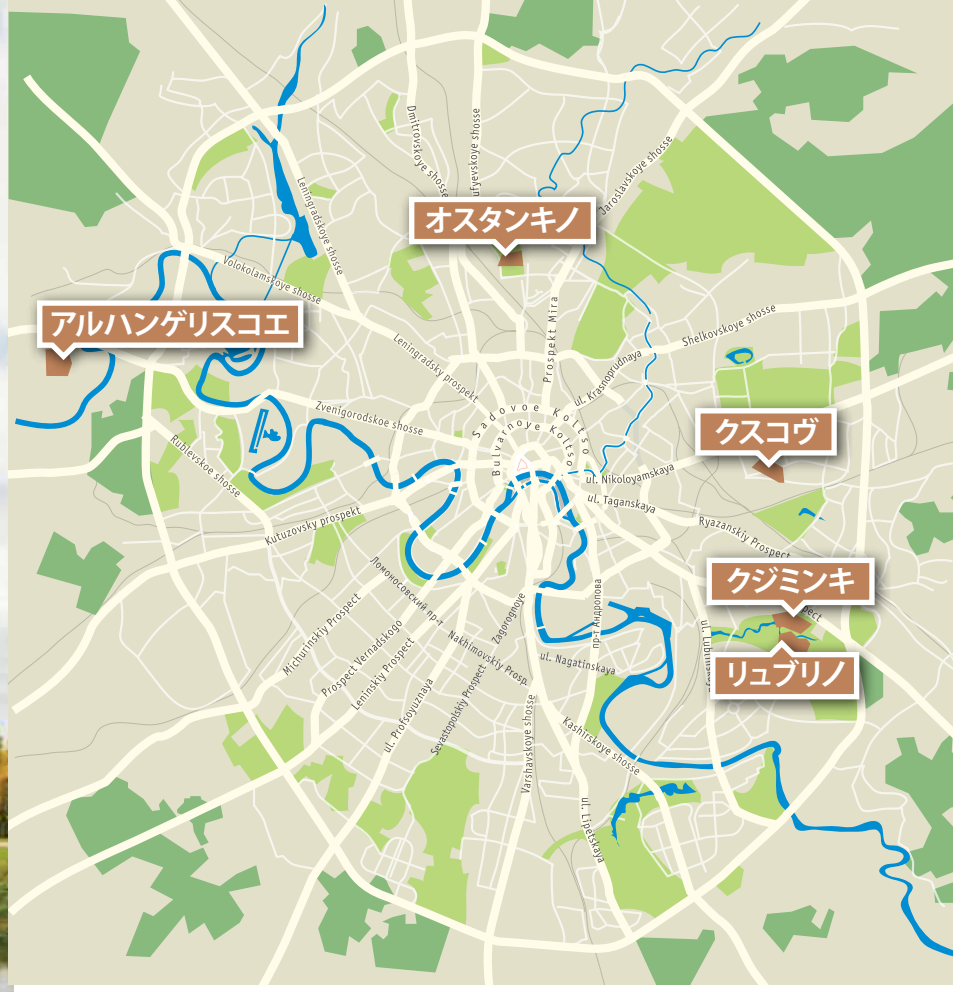
1812年ロシア戦役後にモスクワの再建が始まると、環状並木道が現れ、多くの地区が統一された建築様式にまとめられ、焼けた建物の代わりに道や大通りが生まれ、街は大きく変わりました。A.S.グリボエドフは戯曲「知恵の痛苦」の中で、モスクワの再建について「火災が街の多くの装飾に役だった」と書き、後に有名なフレーズとなりました。1827年にピョートル宮殿は美しい公園にかこまれ、宮殿から続く遊歩道が敷かれ、池を掘り、堤がつくられました。夏の劇場、コンサート用の建物、ぶらんこ、東屋、ビリヤード場、プール、カフェなどのある新しい公園は、とても人気の場所になりました。現在公園の敷地は縮小しましたが、一部残っています。そのひとつの遊歩道は、ピョートル公園の生神女福音教会を建設した、A.D.ナルィシュキナの名前にちなんで、ナルィシュキナ小路と呼ばれています。その息子のドミトリー・パヴロヴィッチとコンスタンチン・パヴロヴィッチは、アレクサンドル・デュマ・ペール（大デュマ）と知り合いでした。デュマ・ペールはモスクワに来た際、ピョートル公園にあったドミトリー・パヴロヴィッチの別荘を客人として訪れました。現在はこの別荘も、他の建築物と同様に残っていません。残っているのは、1844〜1847年に建設された、ピョートル公園の生神女福音教会（blagpb.orthodoxy.ru）と、1908年に建てられたN.P.リャブシンスキーのヴィラ「チョルヌイ・レベジ」です。

クルィラツク丘



美しいクルィラツク丘は、特別自然保護区で、自然・歴史公園「モスクワ川」の一部となっています。
この領域にはかつて、1417年にモスクワ大公のヴァシリー1世の遺言に初めて記された、クルィラツク村がありました。この村が宮殿省に属していたことを証明する、後の記述もあります。この場所は、文献によって、クリタチスコエ、クルィラツコエ、クルィレツコエといった異なる名前となっています。そのことから、羽を意味する「クルィロ」という言葉からついた名前ではなく、玄関を意味する「クルィリツォ」から来たと推測され、実際に、高い丘はモスクワの玄関にもなっているのです。
この場所では、皇族の狩りがよく行われていたことが知られているので、野生動物も多くいたのでしょう。現在はクマなどはいませんが、レッドデータブックに記載されている欧州野ウサギなどの数少ない動物が保存されています。
この場所の名所は、生神女誕生教会で、19世紀に建設されたものですが、最初の教会が建てられたのはイヴァン雷帝の時代です。公園内には「ルドネンスカヤの生神女」もあります。
ロシア革命後は土地が農奴に与えられたため、コルホーズがここにできました。1980年のモスクワ・オリンピックの準備が行われた際、農業関連建築物がすべて解体され、その場所に漕艇場、屋内競輪場、自転車用道路などが建てられました。

旧モスクワ郊外の屋敷



旧モスクワ郊外の屋敷

現在のモスクワの地図を見ると、サドーヴォエ環状道路からまでの場所に、緑色の「島」があることがわかります。この多くが、歴史ある旧モスクワ郊外の名家の屋敷で、現在は公園や博物館に変わっているところです。この郊外の不動産は、センスがあり、当時流行した建築様式に従っているので、「モスクワの真珠の首飾り」と呼ばれていることも納得です。現在は、ただ大切に保管され、修復される歴史的建築物というだけでなく、休息、ロマンチックなデート、写真撮影、家族の散歩、自然などを楽しめる場所になっているのです。

モスクワには、64カ所の建築・公園アンサンブルがあります。モスクワを訪れる人々や、街の住人の文化遺産に対する強い関心をふまえ、モスクワ市政府は美しい建築や庭園・公園芸術の記念物35カ所に対して修繕を行い、行ける場所を増やそうとしています。

クスコヴォとオスタンキノ

このモスクワの端と端に位置する2箇所の屋敷は、1743年からロシア革命の時まで、シェレメチェフ伯爵の家系に属していました。この伯爵の姓は、シェレメチエヴォ国際空港のおかげで、多くの人に知られています。
1743年、アレクセイ・ミハイロヴィッチ・チェルカッスキー公の唯一の娘で、公の家系の最後の代表者となり、多くの遺産を相続した、（ロシアで最大の遺産だったという意見が多いです）ヴァルヴァラ・アレクセエヴナ・チェルカッスカヤは、ピョートル・ボリソヴィッチ・シェレメチェフ伯爵と結婚しました。ピョートル・ボリソヴィッチの父はボリス・ペトロヴィッチ・シェレメチェフで、ピョートル1世がロシアで初めて伯爵の称号を与えた人物です。こうして、多くの財産と土地がまとまりました。チェルカッスキー家はオスタンキノと、モスクワから東側の土地である、ペロフ、ヴィシュニャキ、ヴィロニ、ジュレビノなどを所有していました。ピョートル・ボリソヴィッチ・シェレメチェフ伯爵の不動産である、小さな「クソチカ（小片）」は、そのまま屋敷の名前「クスコヴォ」になりました。

シェレメチェフ伯爵の屋敷だったことと、ヴァルヴァラ・アレクセエヴナがここからそう遠くないヴィシュニャキで育ったことから、夫妻はクスコヴォに住みました。ピョートル・ボリソヴィッチは自分の所有地に、贅の限りを尽くし、美しい宮殿を建設し、肖像画を集め、想像もつかないほどの大規模な歓迎会を催し、毎回異なる新しい娯楽で驚かせながら皇族を招き、当時としてはほとんど類のない豪華な劇場を敷地内につくり、さらに慈善活動を行っていたのに、資産が減ることはありませんでした。逆に正しい管理で多くの収入をもたらしたのです。

シェレメチェフ伯爵は国の仕事に従事し、新法典作成委員会の会議（1767年）に参加しながら、自分の領土の農奴を解放する用意もあることを表明しました。
20年以上の幸せな結婚生活を送った後、ヴァルヴァラ・アレクセエヴナが病気で死去すると、シェレメチェフ伯爵はひどく落ち込み、エカチェリーナ2世に自分をあらゆる国と軍の仕事から解放するよう求めたほどでした。仕事をやめた後でも、自分の領地の整備は怠りませんでした。
シェレメチェフ伯爵はその後次の結婚相手を探すことなく20年

生きて亡くなり、息子のニコライ・ペトロヴィッチがその多くの財産を相続しました。ニコライ・ペトロヴィッチの時代にモスクワ郊外の屋敷はそのさらなる繁栄の時を迎え、クスコヴォとオスタンキノについて話が及ぶ時はニコライ・ペトロヴィッチのことが思い出されます。父と同様に芸術と劇場に夢中になり、皇族を含むさまざまな歓迎会は父親以上の豪華さをほどこしました。こんなできごともありました。ある日、パーヴェル1世がオスタンキノ宮殿を訪れることになると、宮殿を囲む庭園の一部で、帯状の一帯の木々に切れ目を入れておき、その木々のわきに人を立たせました。パーヴェル1世が到着すると、合図でその木々がいっせいに倒れて、一瞬で見事なオスタンキノ宮殿のパノラマがあらわれたのです。

ただ、ニコライ・ペトロヴィッチは上流階級の舞踏会よりも、自分の劇場により興味を持っていました。自分の農奴劇場にいた、美しい声と美貌をかねそなえ、気立てが良かった女優プラスコヴィヤ・イヴァノヴナ・コヴァリョワ・ジェムジュゴワを、情熱的に愛しました。歴史家によると、当時は女性がより身分が低い場合、一人の女性に夢中になるよりも、遊ぶ方が寛大に受け止められていたため、この感情は秘密にしておかなければなりませんでした。

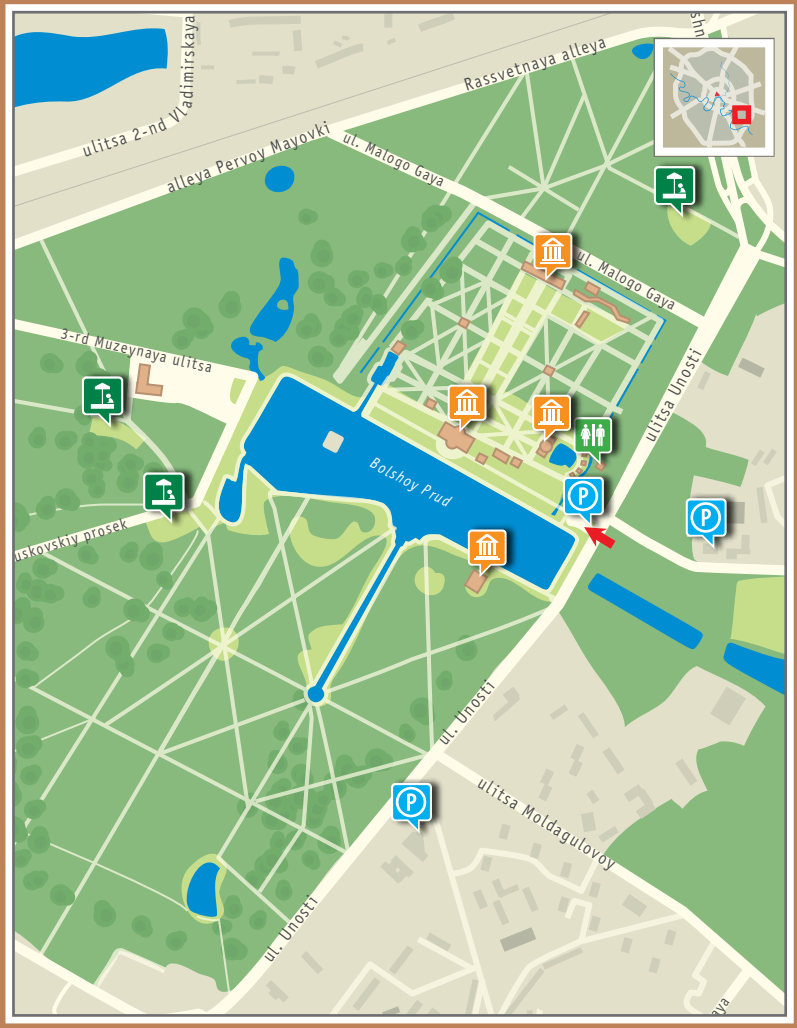
クスコヴォでは、常に歓迎会や祝い事が行われていたため、プラスコヴィヤ・イヴァノヴナはここでとても有名で、噂の的になり、訪れる人が悪い冗談を言ったりすることもあり、これがプラスコヴィヤ・イヴァノヴナをひどく傷つけ、自分の置かれている状況を悩みました。そのため、ニコライ・ペトロヴィッチは、プラスコヴィヤ・イヴァノヴナとオスタンキノに移る決心をしたのです。クスコヴォ劇場は閉鎖され、オスタンキノに新しい芸場が建設されました。ニコライ・ペトロヴィッチの幼馴染であるパーヴェル1世がオスタンキノを訪れた際、プラスコヴィヤ・イヴァノヴナがその家の婦人としてパーヴェル1世を迎えたという証拠があります。プラトン府主教もプラスコヴィヤ・イヴァノヴナの気立ての良さを認め、二人の結婚を支持しました。

社会的な身分の差によるあらゆる困難を乗り越え、1801年に二人はようやく結婚することができました。でも、その幸せな結婚生活はわずか2年で終わりを迎えます。プラスコヴィヤ・イヴァノヴナは息子を産んだ直後の1803年に亡くなりました。悲しみにくれたニコライ・ペトロヴィッチは、妻への思いを込めて、モスクワに貧しい人向けの病院となる浮浪者施設を建設し、さらに劇場を閉鎖して、豪華絢爛な世界の幕を閉じ

ました。ニコライ・ペトロヴィッチは妻が亡くなってから長生きすることはなく、1809年に息を引き取りました。その時6歳だった息子のドミトリーには後見人がつき、1812年のロシア戦役の際に多くの財産を処分し、ドミトリーが成年に達するまでにその多額の財産で大儲けしました。それでもシェレメチェフの財産は多く残り、ドミトリー・ニコラエヴィッチの息子で、ニコライ・ペトロヴィッチとプラスコヴィヤ・イヴァノヴナの孫となる、セルゲイ・ドミトリエヴィッチが、現在のシェレメチエヴォ国際空港近くの土地の最後の所有者となり、その姓がそのまま空港につけられたのです。

シェレメチェフ家は皇族と深いつながりがあり、ボリス・ペトロヴィッチはピョートル1世の盟友で、ポルタヴァの戦いに参加し、ピョートル・ボリソヴィッチはエカチェリーナ2世に信頼されて好かれ、ニコライ・ペトロヴィッチはパーヴェル1世の幼馴染でしたが、シェレメチェフ家の人々はその地位を利用することはなく、逆に慈善事業を行っていました。屋敷は豪華さと優れたセンスの見本となりました。多くの残っている建築物は、建築専門家だけでなく、ここを訪れる一般の人々を感動させ、はるか昔の雰囲気に招いてくれるのです。

国立陶磁器博物館と「18世紀のクスコヴォ邸」



ここは、ロマンチックな人々や夢想家、また舞踏会や上流社会の歓迎会に憧れる人々、啓蒙時代の優雅さに引き付けられる人々にとって、申し分のない場所です。あらゆる芸術が繁栄した時代のクスコヴォ邸は、一見の価値があります。現在も残っている、池の岸に立つ木製の美しい宮殿は、有名なモスクワの建築家カルル・ブランクが率いて1769年から1775年に建設した建物で、建築群の構造的中心となり、多くの来賓を招くことができるように設計しています。外装と内装には18世紀らしさがあります。さまざまな建築要素が昔の世界に人々を招き、馬車が入れるようにつくられたスロープは、馬の蹄鉄の音、舞踏会

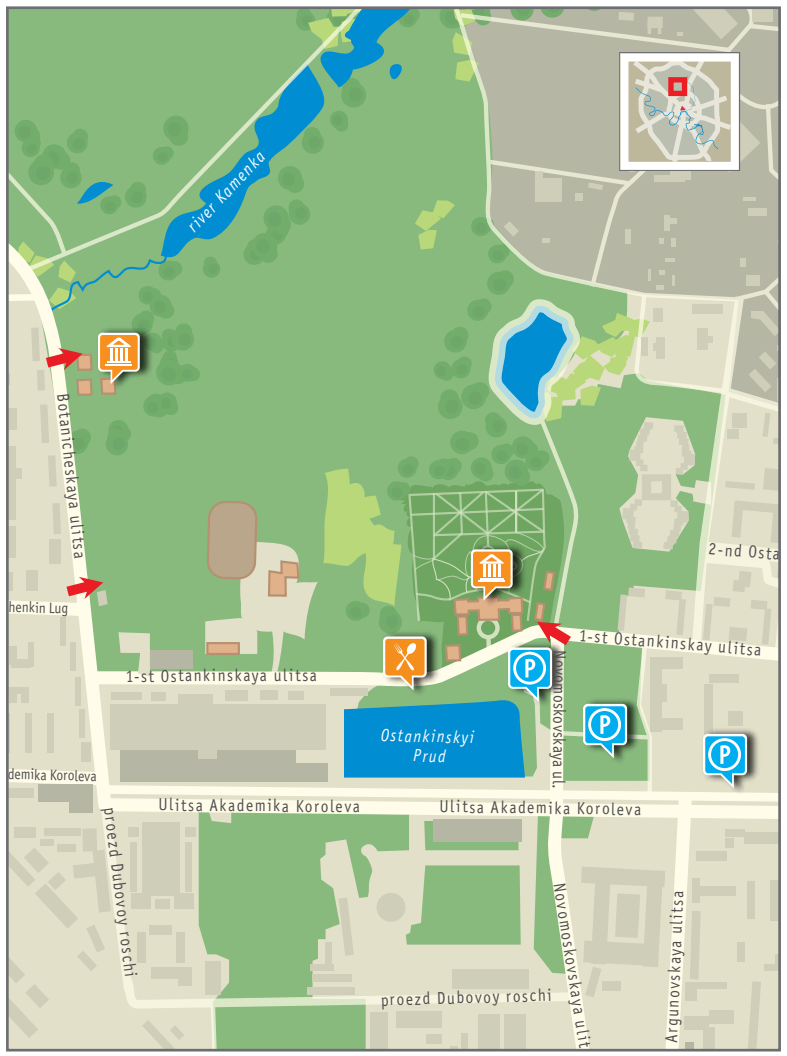
のドレスのかさかさという音、紳士淑女を迎える美しい音楽を奏でているようです。寄木細工の床、暖炉、レリーフ装飾、絵

画、木彫りなどの内装が保存され、お皿、花瓶、その他の陶磁器が置かれていて、本物を見ることができます。
もっとも重要な場所は公園です。フランス式庭園をつくることは大変な芸術作業でしたが、維持することはさらに大変でした。現在まで公園があまり残っていないのはそのためで、1980

年代に再建された、銅像、装飾的花瓶、その他の要素のあるクスコヴォ公園は、庭園・公園芸術というものを示す貴重な場所なのです。
散歩しながら休息をとれるように、通常別棟や東屋がありますが、これは、独特の建築様式がほどこされた別の建築芸術です。
クスコヴォ公園にはオランダ館、イタリア館、エルミタージュなどの別棟や、ストルボヴァヤ、ドリチェスカヤ・ガレレヤ、パゴデンブルク（中国式東屋）などの東屋がありました。現在まで残っている別棟では、展示が行われています。池岸にある別棟のグロトは、その際立ったバロック建築の美しさで、クスコヴォのシンボルとなりました。エカチェリーナ2世は、この屋敷を訪れた際、ここで昼食をとりました。
ロシアの厳しい気候条件で温帯植物を育てて、夏季に散歩道を飾るために、クスコヴォには温室がありました。鉢植え栽培した植物の樹冠を、船や動物などの幾何学的な形に剪定して、それをそのまま温室から公園内に運びました。珍しいほどしっかりと保存された、18世紀のさまざまな様式の建築群もここにあります。
1919年に屋敷は博物館になり、1938年にロシア唯一の陶磁

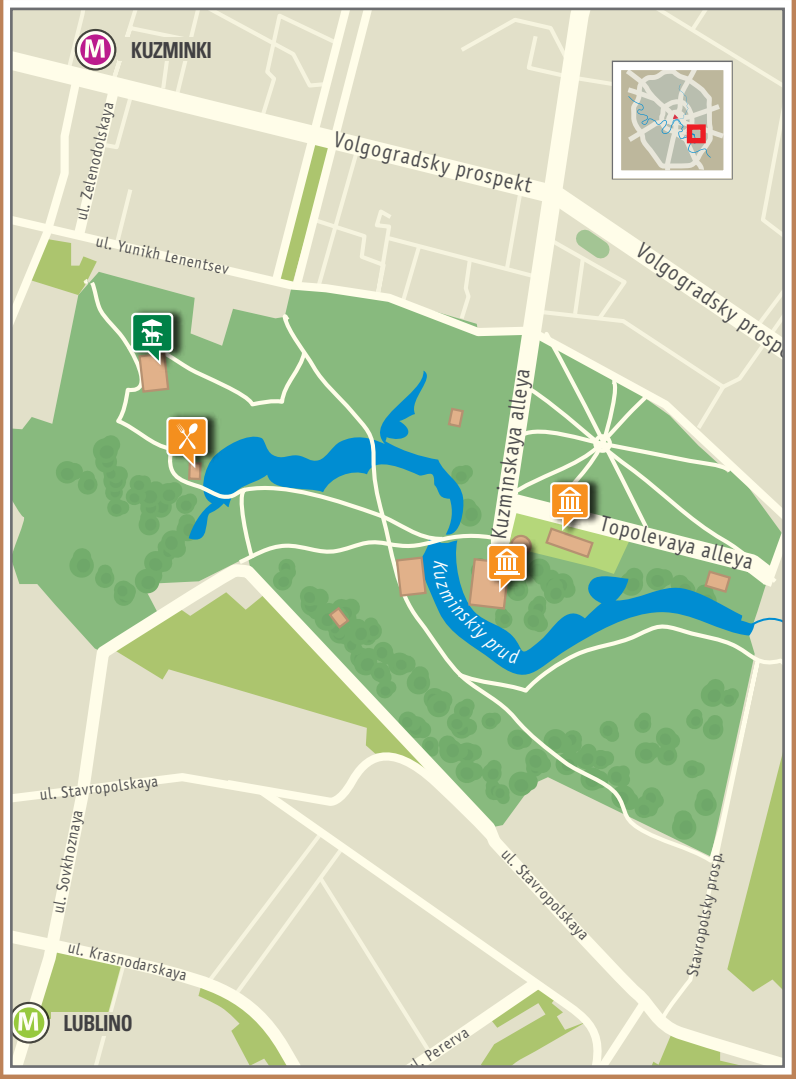
器博物館に変わり、現在は世界有数のアンティークの陶磁器やガラス器のコレクションがそろっています。

オスタンキノ



オスタンキノ宮殿は、チェルカッスキー公が1620年頃から所有していました。何世代にもわたって引き継がれ、その間に家が建設され、庭園がつくられ、池が掘られました。1677年から1692年にかけて、石造りのオスタンキノの施生命至聖三者教会が建設されましたが、これは現在まで残っていて、独自に発展したロシアの彫刻装飾様式を見ることができます。
ヴァルヴァラ・アレクセエヴナとピョートル・ボリソヴィッチがクスコヴォに暮らすようになってから、オスタンキノ邸は家事などで使うのみとなりましたが、放置したわけではなく、庭園を造り、温室を建設して、整備しました。オスタンキノはニコライ・ペトロヴィッチの時代に繁栄します。プラスコヴィヤ・イヴァノヴナとここに引っ越してから、質の高い宮殿劇場を建設しました。
F.カムポレジ、D.クヴァレンギ、K.ブランクなどの建築家や、A.ミロノフ、G.ディクシン、P.アルグノフなどのシェレメチェフの職人が、他にも宮殿を建設していたかどうかは不明です。
ニコライ・ペトロヴィッチは宮殿の建築のみならず、当時としては画期的だったアイデアを自分の領地に採用し、イギリス公園や人工池などをつくりました。
現在、チェルカッスキー家とシェレメチェフ家が所有していたオスタンキノの土地のほとんどが、N.V.ツィツィン大植物園になっていて、建築群のある場所は博物館・宮殿オスタンキノになっています。

自然・歴史公園
クジミンキ



クジミンキ林園には、静かな場所、人の多いにぎやかな場所、池、小川、歴史的建築物、広い林などがあり、異なる好み、季節、年齢に合う休息に適した場所になっています。
クジミンキの近代史は、グリゴリー・ドミトリエヴィッチ・ストロガノフ公が、川にある水車とその周辺の土地の所有者となった、1702年に始まります。ストロガノフ公の曾々孫にちなんで、人気の高いロシアの肉料理が、ビーフ・ストロガノフと名づけられ、現在は世界中の料理本に記載されています。
ストロガノフ家はこの場所の整備を行い、ヴラヘルヌィの生神女イコンの木造教会と、大きな池をつくりました。
1757年、グリゴリー・ドミトリエヴィッチの孫のアンナ・アレクサンドロヴナは、この土地を嫁資として、ミハイル・ミハイロヴィッチ・ゴリツィン公に嫁いだため、長年（ほぼ1917年

のロシア革命まで）ゴリツィン家の屋敷となり、世代ごとにこの場所を見事に装飾していきました。
ミハイル・ミハイロヴィッチの時代には、現代も残っている4

面の池からなるカスケードがつくられ、その息子のセルゲイ・ミハイロヴィッチの時代には、隣接する土地を取得して、さらに拡大され、セルゲイ・ミハイロヴィッチの妻、アヴドチヤ・イヴァノヴナ・ゴリツィナ（イズマイロフ家系）が所有者となりました。セルゲイ・ミハイロヴィッチとアヴドチヤ・イヴァノヴナの関係はうまくいかなかったため、結婚して2年が経過すると、別居を始めました。当時を知る人の話では、美しかったアヴドチヤ・イヴァノヴナは、アレクサンドル1世の侍従武官だったミハイル・ペトロヴィッチ・ドルゴルコフを愛していたそうですが、夫のセルゲイ・ミハイロヴィッチが離婚に応じなかったため、結婚することができなかったそうです。また、ミハイル・ペトロヴィッチは、結婚できると信じていた、アレクサンドル1世の妹のエカチェリーナ・パヴロヴナを愛していましたが、1808年にミハイル・ペトロヴィッチは何者かによって殺害されました。アヴドチヤ・イヴァノヴナはミハイル・ペトロヴィッチへの思いを絶ち切れなかったため、その後結婚をすることはありませんでしたが、独立心のある社交的な性格で、上流社会を楽しまずにはいられませんでした。1816年からは、サンクトペテルブルクのアヴドチヤ・イヴァノヴナの家で、文学サロンが行われるようになり、A.S.プーシキンも訪れていました。プーシキンはアヴドチヤ・イヴァノヴナに恋をしていたため、友人はそれをからかいました。

当時、セルゲイ・ミハイロヴィッチの屋敷は、とても有名でした。1826年以降、女帝マリヤ・フョードロヴナ（パーヴェル1世の妻）、その息子のミハイル・パヴロヴィッチ大公とニコライ1世、ニコライ1世の息子のアレクサンドル・ニコラエヴィッチ皇太子（後のアレクサンドル2世）など、クジミンキには皇族がたびたび訪れていました。

この屋敷の美しさは、当時を知る人々の証言と、古い絵でしか確認することができません。1859年にセルゲイ・ミハイロヴィッチが亡くなると、屋敷は親戚に相続されましたが、整備は一切行われず、夏の別荘として貸し出していました。

有名な建築家が設計した、たくさんの建築物があったにもかかわらず、一部しか残っていません。ストロガノフ時代に建設され、ゴリツィン時代に改築された家は、1916年に火事で焼失したため、17世紀末に建設されたヴラヘルヌィの生神女イコン教会が重要な名所となっています。クジミンキはかつて、住んでいた人々からヴラヘルヌィからヴラヘルンスコエと呼ばれていたこともありました。

ヴェルフニー池のそばに立つ、1805年に建設され、1823年に改築された、有名な建築家ドメニコ・ジラルディのコンヌイ小屋から、当時の様子をイメージすることができます。コンヌイ小屋のコンヌイとは、馬を意味するので、ここがどのような場所だったかは想像がつきますが、馬小屋や、馬車を保管する馬車小屋がありました。サンクトペテルブルクのアニチコフ橋に設置されている、彫刻家P.K.クロォトの彫刻に似た彫刻があることは興味深いです。また、同じものがベルリンとナポリにもあります。

ここには鳥小屋、家畜飼育場、温室、船が停泊している桟橋、別棟、記念建築物など、30点以上が残っています。これらはすべて、同じアンサンブルで建てられました。

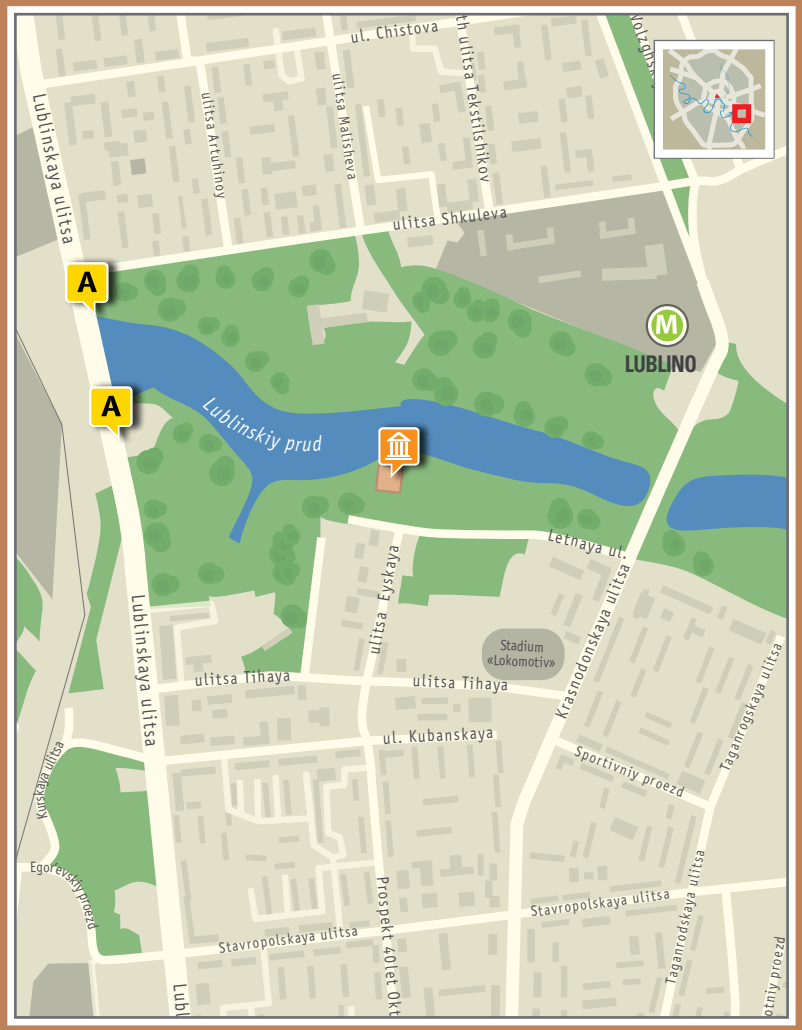
現在敷地内には、K.G.パウストフスキー博物館・センター、ロシア荘園文化博物館、旧車・乗車者博物館などがあります。

アルハンゲリスコエ

モスクワ郊外にあるこの屋敷は、その歴史の中で所有者がさまざまに変わりながら、異なる時代を見つめてきました。もっとも有名となったのは、裕福な家系の出身で多くの財産を所有していた、ニコライ・ボリソヴィッチ・ユスポフ公の時代です。ニコライ・ボリソヴィッチは芸術品の収集家、愛好家として知られていました。国の仕事でも、武器庫、クレムリン建築部の管理責任者、帝国劇場の館長、エルミタージュ館長など、芸術とかかわりのある役職についていました。
プーシキンと知り合いで、プーシキンは「貴人へ」というニコライ・ボリソヴィッチの詩を買い手います。ここには、有名な芸術家のA.N.ベウナ、K.A.コロヴィン、K.E.マコフスキー、V.A.セロフなども訪れています。
アルハンゲリスコエという村の名前は、アルハンゲリスク市とは関係ありません。1660年から1667年にかけて建てられた、この敷地内でもっとも古い建築物の、大天使ミハイル教会の大天使を意味するアルハンゲルからきています。この教会が、アルハンゲリスコエの建築群に導きますが、様式は異なります。
宮殿・公園群は豪華に広がり、その調和のとれた厳格な美で非常に強い印象を与えます。1780年から1790年代に、当時の流行に合わせて建設されました。フランスの建築家シャルル・ド・ゲルンの設計にもとづいて建設されたこの美しい宮殿には、段丘の公園があり、そこには温室、住居用離れ、小さなお城「カプリズ」、乗馬練習場などの他の建物があります。
ロシア革命まで、この屋敷はユスポフが所有していましたが、その後国有化され、ユスポフ家は外国に亡命しました。1919年から、ここは博物館となり、絵画、アンティーク、陶磁器、珍本、その他さまざまな本物の展示品が所蔵されています。
公園と屋敷以外にも川があり、見事なフランス式庭園を引きたてています。

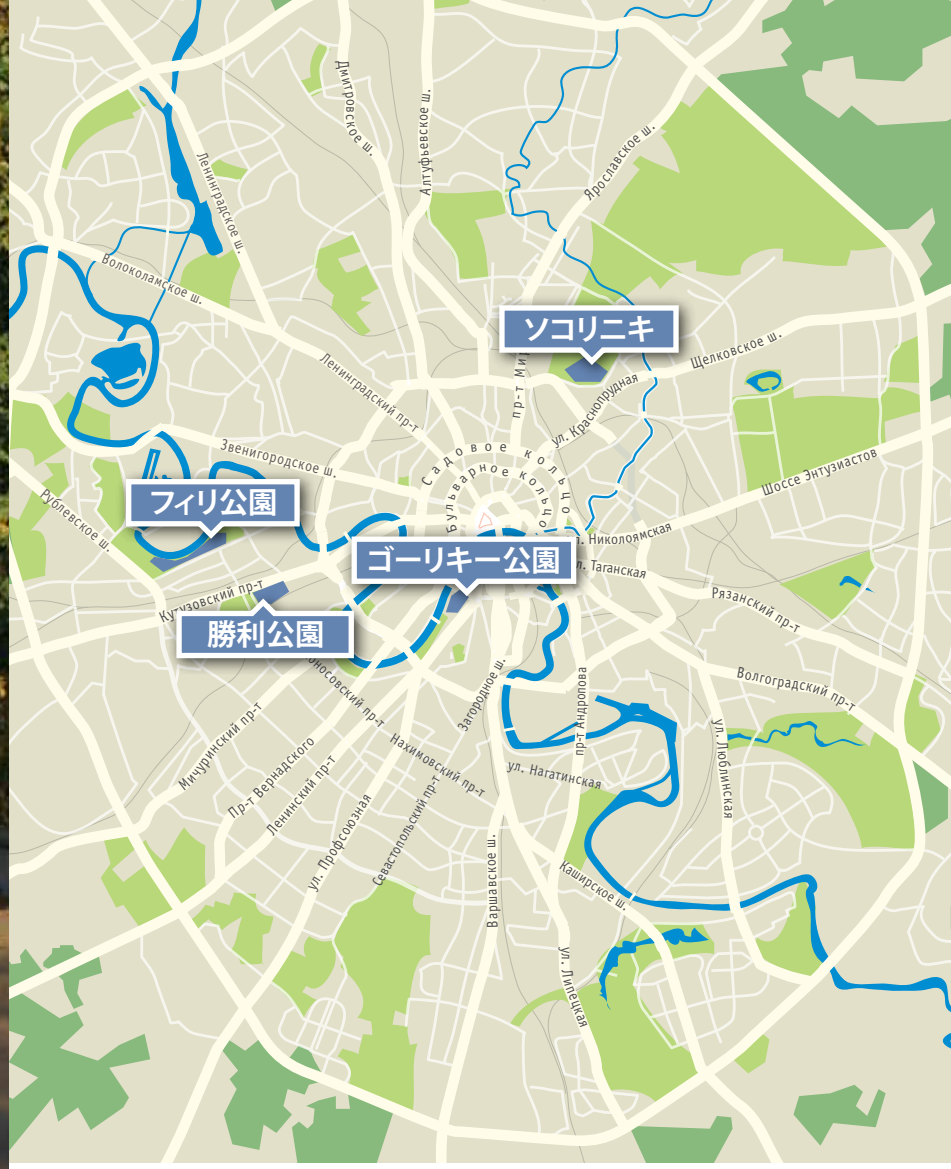
最近、アルハンゲリスコエは毎年夏季に開催される、ジャズ・フェスティバルのおかげでとても有名になりました。

リュブリノ



モスクワの辺境地域にある多くの土地には、多くの歴史が隠されていて、自然的また歴史的記念物があり、文書による記録も残っています。リュブリノ屋敷も例外ではなく、16世紀からこの場所に関する記述が現れます。1801年から1806年に建設されたここの宮殿には特徴があります。
当時の所有者は、裕福なことで有名だったニコライ・アレクセエヴィッチ・ドゥラソフで、有名なモスクワの建築家R.R.カザコフとI.V.エヴォトフを招いて、建築群の設計を任せました。この二人が宮殿をつくったのです。この建物の設計は、十字と円が組み合わせたもので、ニコライ・アレクセエヴィッチに授与された、一等聖アンナ勲章の形をもとにしたとも言われています。
内装は豪華で、古代神話の浅浮き彫りや大きな円柱の絵などで飾られ、ホールには大理石が使われています。絵、装飾的要素、美しい家具などを組み合わせて、宮殿を本物の芸術の場にしました。
古典主義様式の他の建築物は、リュブリノ池のあるイギリス式庭園と同様、現在は一部しか残っていません。
豪華な屋敷の建築物を想像することしかできないのは残念なことです。1917年のロシア革命後は、宮殿と屋敷の所有者が何度も変わり、保存状態は悪くなりました。2001年から2005年に改築された宮殿は、モスクワ国立博物館・自然公園の一部になっています。ここでは見本市、クラシック・コンサート、講義などが行われており、再び芸術の場になっています。

公園



モスクワの緑地は、昔の屋敷や静かな孤立した場所だけでなく、アトラクション、運動場、イベント場のある現代的な公園もあります。にぎやかで明るく、子供の笑い声がひびいています。こういった文化と休息の公園の総面積は、1427ヘクタールにもなり、毎年1550万人の人々が訪れます。24時間営業のゴーリキー公園をのぞいて、夏季にはどの公園も朝8時から夜中の12時まで開いていて、入場料は無料となっています。現在モスクワには、文化と休息の公園が14箇所あり、体を動かすのが好きな人々がさまざまに楽しんでいます。

ゴーリキー公園

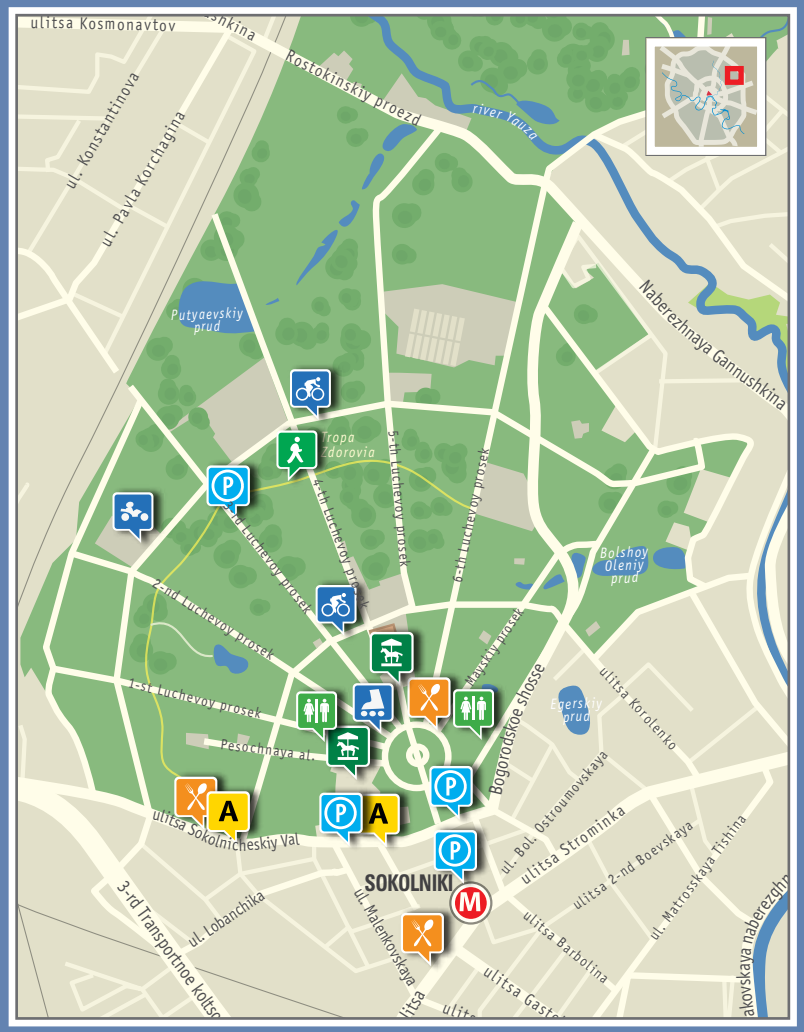
ゴーリキー中央文化・休息公園は、ゴーリキー・パークとも呼ばれ、ロシア国内のみならず、世界でも有名です。1928年に開業したこの公園は、異なる時代を見つめてきました。ソ連の繁栄、幸福な子供時代、文化的余暇のシンボルだったこの場所には、荘厳で華麗な様式（建築家V.A.シチュコ）でつくられた入口、子供用アトラクション、見本市用パビリオン、噴水、花壇などがあり、観光名所として、観光客が必ず訪れる場所になっていました。

1990年代初めから、国の経済と政治の構造が変化し、公園も変わりました。入場料は有料になり、夏のカフェやシャシリク（串焼き肉）屋が建てられ、かつて愛されたアトラクションは放置されました。休息を取りたい人は公園を訪れていましたが、以前のような輝きは見られませんでした。

ゴーリキー公園を、かつてのようにロシア最高の豪華な公園に戻すという課題は簡単ではありませんでしたが、2011年に大規模な改修工事が行われ、昔の名残をそのまま残しながら、世界レベルの休息の場所にしたのです。

よみがえったこの公園は、入場料も以前のように無料になり、24時間営業になりました。ここにはさまざまな娯楽が用意されているので、自分に合う場所をここで見つけるのは難しくはありません。自転車や7人乗り自転車のレンタル、卓球台50台、テニスコート、バドミントンコート、スケート場、水上自転車や双胴船をレンタルできる、ピオネル池やゴリツィン池の停泊所などがあります。カラー音楽噴水は見事で、夜はロマンチックでもあります。子供向けには、子供が創作的活動を行える場所があり、アニメーターやボディーペインターが働いていて、モスクワ最大の砂場もあります。自然の中で休んだり本を読んだりすることが好きな人のために、やわらかい腰掛けやデッキチェアーが、またネット中毒者のためには、無料WI-FIもあります。500席ある「オリーヴ・ビーチ」では、無料のフィットネス、ダンス、ヨガ、気功の教室も開かれています。その他、視覚的、文化大衆的、身体鍛錬・健康的イベント、コンサート、演劇、野外行楽、フェスティバルなど、たくさんの楽しみがあります。夏季の屋外シネマ、緑地も忘れてはいけません。これらはゴーリキー公園の公園広場部分でしかなく、有名なニエスクチヌイ庭園もあります（参照ページ）。この場所は、モスクワ市の統一国家文化施設となっています。

ソコリニキ



この場所と公園の名前となっているソコリニキとは、ハヤブサや勇ましいを意味するソコルという言葉から派生したものですが、15世紀に、皇帝アレクセイ・ミハイロヴィッチが好んだ、公族や皇族のハヤブサ狩りが、実際にここで行われていました。また、大規模な娯楽も催され、ピョートル1世の時代、そのためにマイスキーと名づけられた帯状の空き地がつくられましたが、現在まで残っています。1879年、この土地の所有者はモスクワ市になりました。そのため、古い建築物はありませんが、特別な雰囲気がただよっています。

現代の「ソコリニキ」文化・休息公園は、1931年に建築されました。この場所は、庭園・公園芸術地域的記念物として、文化遺産になっている他、一部は特別自然保護区にもなっています。この公園はまるでひとりひとりの来園者のためにつくられているように、さまざまなオプションがあります。

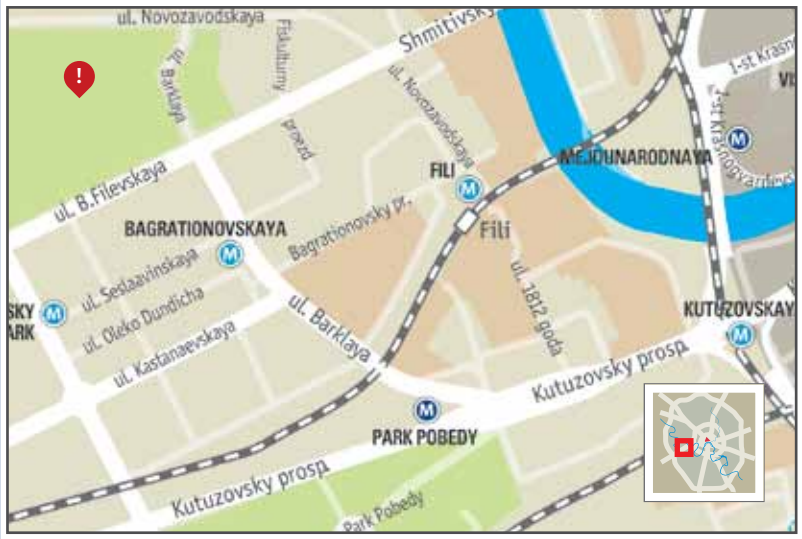
ここは国立公園「ヘラジカ島」と隣接しているため、未開の自然があるのが魅力的です（参照ページ68）。自然が好きでもなかなか遠出できないという人には、理想的な散歩の場所となっています。優れた芸術家I.I.レヴィンタンの「ソコリニキの秋の日」という絵画のように、秋の黄金色の落ち葉で覆われた道は遠くまで続き、ベンチは赤く燃えるカエデの葉を見つめながら、座って夢を見るよう、招いてくれます。ソコリニキは現在でもその姿を変えていません。

バラ園とライラック園も魅力的です。大小のバラ園は、単なる花壇や茂みではなく、心から休める美しい場所となっています。バラの木の下にある芳香ただよう快適なベンチは、まるでロマンチックな映画の飾りのようです。デートや写真撮影、また敷地内に広がる香りを楽しむことのできる場所です。

もうひとつソコリニキのシンボルとなっているものに、ダンスがあります。東屋とそこから広がる敷地が印象的な「ロトンダ」は、ワルツを踊っているお年寄りや、ダンスを楽しむ若者を見れる場所で、ディスコ、ダンス・パーティーなどが開催されます。子供向けには、アトラクションや遊び場、体の不自由な子供のための設備や、インタラクティブな科学の展示品があるインノパルクもあります。ソコリニキには冬季になると氷の街がつくられ、2011年からは氷博物館も企画されるようになりました。

ここには会議・見本市センターもあり、見本市、会議、コンサート、スポーツ・イベントなどが開催されます。公園内では、運動用具のレンタルが行われていて、さまざまなスポーツの施設が整備され、エクストリーム・ゾーンと呼ばれる、新種のスポーツが楽しめる場所も用意されています。

フィリ公園

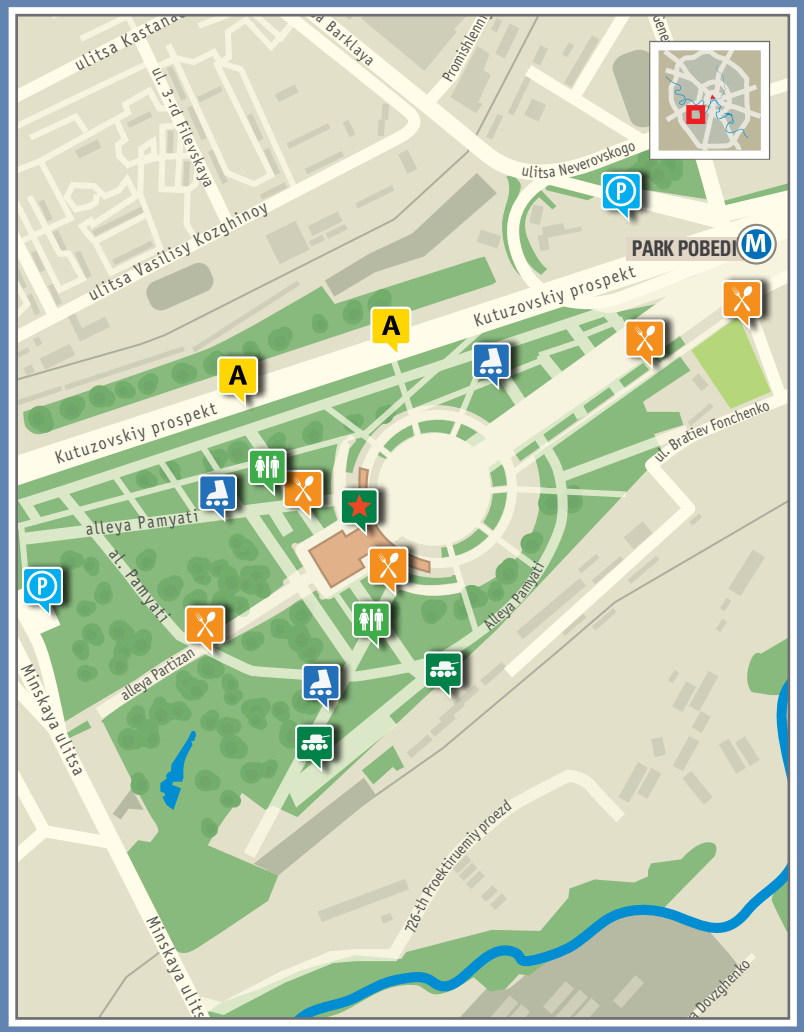


フィリという名前を聞くと、ロシア人はすぐに、1812年の祖国戦争の最中、ここからそう遠くはないフィリ村で行われた有名な軍事会議をイメージします。この村は以前はモスクワ郊外にありましたが、1920年代にモスクワが拡大すると、フィリやクンツェフといった村はどんどん吸収され、そのままモスクワ市の地区名になっていきました。以前の村の場所すべてに建物が立ち、アスファルトの道路がつくられているわけではなく、未開の自然も残っていて、緑を楽しんだり、公園内の静かな場所で考えごとにふけったり、スポーツをやったりすることができます。フィリ・クンツェフ林園がそのような場所で、フィリョフスキー公園とスヴォロフスキー公園が含まれます。モスクワ川の河畔に位置し、さまざまな植物や動物が存在し、樹齢100年ほどの木々、昔のリンゴ園、動物や鳥などは、街の喧騒を忘れさせてくれます。ここにはさまざまな歴史があることを、考古学者は証明しています。ここには「呪われた場所」と呼ばれる、クンツェフ防塞集落趾があります。人々は、十分な知識のないまま、ここを呪われた場所だと言い、悪魔が不思議な物をここに持ってきたと書いています。
昔の人々が住んでいた場所は通常は保存されませんが、そういった場所が触れられずに残っていると、その後の文化に覆い隠され、何かが発見されると、あり得ない伝説が生まれるのです。コロメンスコエのゴロソフ雨裂では、タタール・モンゴル軍舞台が数百年後に霧の中から現れたとか、クンツェフでは教

会が丸ごと地中に吸い込まれたとか言われていますが、これらすべては歴史家の優れた研究材料となるのです。詳細な科学調査が行われると、昔の謎はとけ、文化の発展についてより多くを知れるようになるのです。クンツェフ防塞集落趾については、ここにそのような集落があり、約2500年ほど前から人が住むようになったことがわかっています。ここに住んだ人々は、土器の破片、骨角器、農具などを残して行っています。
近代では、ナルィシキンがこの場所を所有していましたが、最初の所有者となったのは、ピョートル1世の母であるナタリヤ・キリロヴナ・ナルィシキナの兄弟、すなわち、皇帝のおじさんであるレフ・キリロヴィッチ・ナルィシキンです。ナルィシキン家は1865年までここを所有していました。当時、この屋敷には、エカチェリーナ2世、プロイセン王のフリードリヒ・ヴィルヘルム3世、アレクサンドル2世、女帝マリヤ・フョードロヴナなど、ロシアや外国の皇族が訪れていました。それでも、所有者はサンクトペテルブルクに暮らしていたため、このような土地を所有することは無駄であるとの結論に達し、商人のK.T.ソルダテンコフに売りました。ソルダテンコフはこの場所をしっかりと整備し、農奴に林を使うことを許可していたため、農奴は尊敬の念を持って新しい所有者に接しました。また、国民の啓蒙の問題を心配し、当時の多くの優れた人々と話をして、絵画をたくさん集め、美術館に渡しました。それらの作品が、現代でもトレチャコフ美術館やロシア美術館に所蔵されています。
ここには歴史家N.M.カラムジン、詩人M.Y.レルモントフ、芸術家I.N.クラムスコイ、A.K.サヴラソフ、V.V.プキレフ、M.A.ヴルベリ、作家L.N.トルストイ、A.I.ゲルツェン、作曲家P.I.チャイコフスキーなどが訪れました。

現在敷地内には、歴史・民族学センター「職人の街」と、ロバノフ・ロストフスキー公博物館・屋敷があります。これは、昔の手工芸、文化、日常の歴史について学ぶことのできる、老若男女のための現代建築です。

勝利公園



1941年から1945年の大祖国戦争に勝利したことが、ロシア人にとってどのような意味を持っているかということは、ご説明するまでもないでしょう。戦争とは、あらゆる国民の脳裏に焼きつけられる大きな悲劇で、勝利とは、大きな意義のあるできごとで、勇敢さと勇気の結果です。そのため、ロシアやモスクワには、それらのできごとと関連した名称がたくさんあるのです。英雄や司令官の名前は、道となり、広場となり、大通りとなりました。ロシアや旧ソ連共和国の30以上の都市には勝利公園があり、モスクワも例外ではありません。

勝利公園をつくるという考えは、戦時中からすでにありましたが、具現化されたのは1950年代で、記念施設は戦後半世紀が経過した、1995年にオープンしました。

ここには戦争のシンボルや証拠がたくさんあり、中心路には、戦争の日数と同じ1418個の噴水があり、勝利記念碑の高さは141.8メートルとなっています。公園の敷地内には、戦争に参加した人々の機械や設備が300点以上展示された、大祖国戦争時代の軍事技術展が常設されています。

お辞儀が丘の重要な歴史的、文化的施設となっているのは、大祖国戦争中央博物館で、1986年に建設され、もっとも貴重な記念物のひとつ、1945年4月30日に、ドイツ・ベルリンの帝国議会の上に掲げられた勝利旗を所蔵しています。主要な戦場を再現した6箇所のジオラマは、とても見ごたえがあり、来場者に強い印象を与えます。5万点の展示品の中には、武器、機械、制服、賞品、写真、書類、本、プラカード、造形芸術作品などがあります。

お辞儀が丘には、聖大致命者凱旋者ゲオルギイ教会、記念モスク、記念シナゴーグなどのさまざまな宗教施設も建設されています。

公園と記念施設の場所がここになったのは偶然ではありません。昔、お辞儀が丘はモスクワ郊外に位置していたため、商人や旅行者はここからモスクワのパノラマを見て、モスクワの教会に頭を下げました。そこからこのような名称がついたのです。

モスクワへの入口では、貴賓もお辞儀をしました。これを知っていたナポレオンは、モスクワの鍵を持った貴族をここで待ちましたが、思惑通りにはいきませんでした。勝利という二つの戦争の象徴的な関係により、上空に広がる平和な空の価値を教えてくれる勝利公園として、お辞儀が丘が選ばれたのです。

庭園

モスクワの公園で庭園と呼ばれる場所は、諸条件によるものですが、なぜ一部の緑地が庭園と呼ばれているのでしょうか。モスクワには、実のなるフルーツの木のある公園もあります。モスクワの有名な庭園や畑について、さまざまなエピソードを交えながら、ご紹介してまいります。

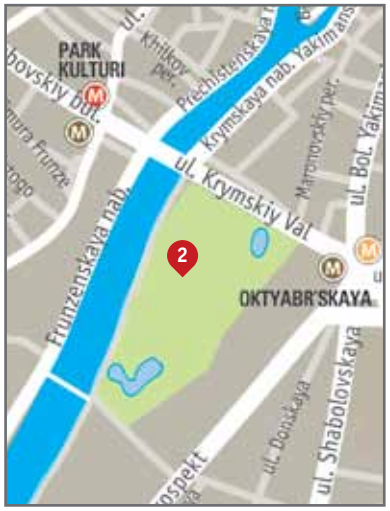
1 ロシア科学アカデミーN.V.ツィツィン大植物園

ロシア、特にモスクワで植物園をつくるには、長い歴史を要しました。薬草のさまざまな種類を栽培するため、また温帯植物をロシアの気候条件のもとで栽培するために、人々は昔から試行錯誤してきました。アレクセイ・ミハイロヴィッチ時代のイズマイロフやコロメンスコエなど、皇族の世襲領地では、17世紀に異なる種類の植物の栽培が試みられました。こういった試みは放り出されることなく、むしろ拡大し続け、ロシアや世界中にたくさんの植物園が建てられることとなりました。ツィツィン大植物園はモスクワの誇りです。敷地面積は361ヘクタールで、生きた展示品の中には樹木園、保護オーク林、常咲庭園、日本庭園、沿岸植物園、温室などがあり、世界全大陸のあらゆる気候帯の植物を見ることができます。
ここには、1945年4月14日の創設以来35年間勤務した、初代園長でアカデミー研究員のN.V.ツィツィンの名前がついていますが、歴史はそれよりずっと前から始まっています。昔ここにはチェルカッスキー公の狩場があり、ピョートル1世の父である皇帝アレクセイ・ミハイロヴィッチも狩りに訪れていました。ヴァルヴァラ・アレクセエヴナ・チェルカッスカヤが、ピョートル・ボリソヴィッチ・シェレメチェフ伯爵と結婚したため、1743年にこの場所の所有者がシェレメチェフ家に変わり、その後慈善事業に熱心だった、夫妻の息子のニコライ・ペトロヴィッチ・シェレメチェフ伯爵が、ここを整備しました。このようにして、イギリス公園と、ヤウザ川支流のカメンカ川から水が流れる、5面の人工池がつくられました。こ植物園の土地の一部が含まれたオスタンキノの繁栄は長くはありませんでした。N.P.シェレメチェフの運命

については、オスタンキノ屋敷に関する案内に詳細に記載されています（参照ページ）。1809年にニコライ・ペトロヴィッチが亡くなった後、屋敷の整備は行われなくなり、ほぼ放置された状態になっていまいましたが、20世紀に入ってから植物園ができたことで、息吹を吹き返しました。
通常緑地は、住居の建築などの用途で木々が伐採され、時間の経過とともに縮小していくため、歴史的な林はあまり残らないものですが、ここは幸いに保存されたため、オスタンキノのオーク森やレオノフスキー林に含まれるエルデニエフスカヤ庭園を散歩することが可能なのです。
植物園の主な科学的課題は、多種多様な植物の保存、その特徴の研究、栽培方法の研究で、娯楽的課題は、休息、デート、子供との散歩に適した場所の整備です。遠く海外に足を運ばずにして、世界中のさまざまな植物を見ることができます。
全ロシア博覧センターと隣接している場所には、「ヨーロッパ・ロシア」、「コーカサス」、「中央アジア」、「シベリア、「極東」、「自然植物の薬草」の6箇所の植物・地理的展示スペースがあります。また、栽培植物の展示スペースも10箇所あり、農業植物の発祥や進化や、長年の栽培によって豊作を可能にした経緯について、知ることができ、栽培植物の野生種なども見ることができます。栽培植物がうまくいく秘訣は、良質の植えつけ材料のみならず、正しく土壌を耕し、植物の手入れをすることで、このような話も展示スペースで知ることができます。
1994年にオープンした「カルーナ園」には、カルーナの種類、エリカ、シャクナゲ、針葉樹、装飾的低木などがあります。バラ園には、長持ちする品種、価値の高い品種、美しい品種などがあります。日本庭園は、日本的な美しい風景をつくりだしている緑の芸術です。
この植物園では、珍しく美しい植物を堪能するだけでなく、秋には種、庭や畑に植えることのできる苗木、その他の植えつけ材料を入手することができます。

❷ ニエスクチヌイ庭園

ニエスクチヌイ（退屈じゃない）という名前を聞いただけで、思わず期待してしまいますが、実際にここを散歩して後悔することはないでしょう。1人の人物がかつて所有していた場所につくられる、モスクワの他の多くの公園とは異なり、3箇所の屋敷を合わせたこの庭園は、さまざまな時代に異なる人々によって所有されてきました。
例えば、たくさんの鉱業会社を所有し、数百万もの財産を保有していた、プロコフィイ・アキンフィエヴィッチ・デミドフ（1710〜1786）です。トレチャコフ美術館に行ったことのある人なら、有名な芸術家D.G.レヴィツキーが描いた肖像画で知っているかもしれません。大富豪が園芸用じょうろにもたれかかっているこの絵は、この二つのモデルがあまりそぐわないことから、注意をひきます。プロコフィイ・アキンフィエヴィッチを知る人物にとって、これは不思議な光景ではありません。モスクワ川河畔のこの土地で、驚くほど独創性に富んだ植物園を整備したのです。この植物園では、世界中の約2000種の植物が栽培され、温室ではパイナップルまでつくられていたことは有名です。プロコフィイ・アキンフィエヴィッチの植物への愛はとても強く、「嫉妬心」から、白亜で真っ白に塗った庭師に彫像のフリをさせて訪



問者の監視役にしました。訪問者が珍しい植物を摘み取ろうとすると、その「彫像」はすぐに反応しました。プロコフィイ・アキンフィエヴィッチは自然や植物の愛好家に、押し花用の植物を採取することを許容していたことは有名なので、これは単なる噂にすぎないかもしれません。慈善事業に熱心で、特に捨て子、浮浪児、孤児などをしつけ、教育を受けさせる、帝国孤児養育院には、多額の寄付をしていました。
次のこの場所の所有者は、軍や国の仕事をし、エカチェリーナ2世の盟友だったアレクセイ・グリゴリエヴィッチ・オルロフ伯爵（1737〜1807）です。アレクセイ・グリゴリエヴィッチと、その兄のグリゴリー・グリゴリエヴィッチ（エカチェリーナ2世の愛人）が、エカチェリーナ2世が女帝に即位したとい

う国の大きな変化に関わっていたことについて、歴史家は数々の記述を残しましたが、そのうちの多くが矛盾しています。その代わり、1770年のチェスマ海戦の勝利で、オルロフ・チェスメンスキーと名乗る権利を与えられたことは、事実です。アレクセイ・グリゴリエヴィッチの名声により、オルロフ・トロッター種という馬の種類にその姓が使われました。歴史家によると、名声を愛していたものの、オープンで愛想が良く、親切で、ロシア風の生活を送っていたため、モスクワでは好かれていました。また、蹄鉄を手で曲げたという逸話があるほど、非常に力が強かったということです。こういった特徴と軍の功績などにより、あらゆる身分の人々をひきつけていました。この場所では自分の娘のために、お祝いごとや饗宴を行っていました。ここには、ステージ装飾の代わりに木々が使用された、屋根付きのギャラリーのある、オルロフ伯爵の「屋外劇場」がありました。
デミドフ家からオルロフ家に引き継がれた宮殿は、現在でも残っていて、この18世紀の歴史的建造物に、ロシア科学アカデミーが入っています。
トルベツキー・シャホフスキーと、ゴリツィンの屋敷がここに隣接していましたが、ニエスクチヌイと呼ばれていたのがどこの屋敷だったのかについては、未だに歴史家の意見が一致しておらず、ニコライ1世がこの領域すべてをまとめて購入したことで、ここの全域がニエスクチヌイという名称になりました。ニコライ1世はこの美しい庭園を、自分の妻のアレクサンドル・フョードロヴナに贈りましたが、生活の拠点はサンクトペ

テルブルクにあったため、皇族はここをあまり訪れませんでした。それ以降の時代にはモスクワっ子が自由に出入りできる場所となり、多くの人々が散歩に訪れました。
現在、ニエスクチヌイ庭園は、ゴーリキー中央文化・休息公園の一部となっていますが、その独自性と魅力を残した、特別な場所であることには変りありません。現在でも残っている昔の建築物や、ソ連時代の建築的名所には、夏の家、オルロフ伯爵の時代に建設された乗馬練習場の建物、またロシアのテレビ番組の撮影の場となっている狩りの家、小さな滝のついた泳ぎ手の像、モスクワ800周年記念ロトンダ・東屋などがあります。
また、図書館、児童乗馬学校、A.E.フェルスマン鉱物博物館などが営業しています。スポーツ好きは、テニス・コート、卓球台を使用して楽しむことができます。
レッドデータブックに掲載されている約60種の木や、珍しい鳥が生息する、広大な美しい森もあり、専門家によると、ここはモスクワでもっともヨナキツグミが多くいる場所だということです。

❸ 薬草園

画像共有やカメラの普及により、モスクワではM.V.ロモノーソフ・モスクワ国立総合大学植物園である薬草園を訪れることが流行しています。この場所に人気がある理由は、街のほぼ中心部に位置していて、行きやすいこと、また、小さな場所にさまざまな植物が密集していることなどです。毎シーズン、カメラを持った人々が道をふさぎ、横たわったり、立ったり、しゃがんだり、座ったり、ジャンプしたりしながら、生きた自然の美や多様さを撮影しようとしますし、若いカップルは、この場所のロマンチックさにため息をもらしています。すぐにしおれてしまう花束を女性に買うより

も、この場所をそのままプレゼントして、一生この印象を記憶してもらった方がいいと考えています。子供連れの家族は、新鮮な空気を子供に吸わせたり、学校の理科の授業で習う植物を見せたりしています。仕事で忙しい人々は、びっしりと詰まったスケジュールからほんの少しの時間でも解放されようと、ここを訪れて、自然のエネルギーを吸収していきます。

薬草園はピョートル1世の時代に創設されたもので、現代まで残っている植物園の中ではもっとも古く、ロシア語のもとの名称である「アプテカルスキー・オゴロド」の、「薬の、薬剤師の、薬局用の」を意味するアプテカルスキーとは、ここで育てられる植物が薬の調合用や、医科大学の学生の植物学の学習用を意図しています。1805年から、モスクワ大学の管理下に置かれています。

❹ エルミタージュ庭園

この庭園内では、「ゼルカリヌイ劇場」の中に入っている「ノヴァヤ・オペラ」や、「スフェラ」、「エルミタージュ」という3箇所の劇場が活動しているため、モスクワはそれ以外の街の演劇愛好家には有名な場所です。メルポメネの観客としてここに来る人々も、庭園・公園芸術の本物の作品となっているこの庭園には関心を寄せずにはいられません。

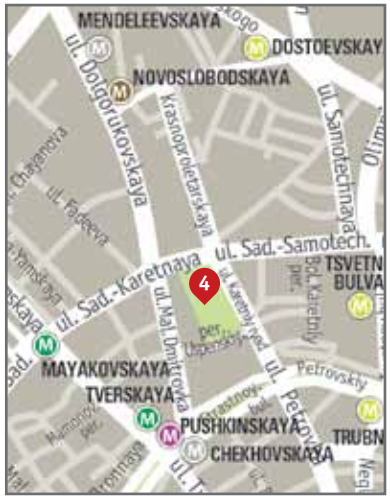
モスクワのそれぞれの公園に歴史があり、その場所のみならず、特定の歴史的な時代の、人々の習慣、生活様式、特徴について語ってくれます。19世紀末は、誰もが劇場に夢中になっていました。この芸術は社会の生活で大きな意義をもつようになり、劇作家、俳優、監督などに対する姿勢が変わりました。そして徐々に、映画も存在感を増すようになりました。

1894年、モスクワ中心部に、演劇愛好家の間で有名な、演劇活動家のY.V.シチュキンが「ノヴィ・エルミタージュ」庭園を創設しました。シチュキンは農奴一家に生まれ、准医師の教育を受けましたが、多くの収入をもたらすビュッフェやレストランをつくるという商業活動に従事するようになり、第二ギルドの商人になりました。

その後、演劇との関係を持つようになり、ピョートル公園で歓楽的イベントを組織した後、自分の劇場をつくる決心をし、外国人やロシア人の興行を行いながら、演劇興行主として有名になりました。

1894年に、劇場と夏の庭園をつくり、翌年に厳かな開業式を行いました。

この場所は、モスクワの重要な文化的ニュースで有名になりました。1896年5月26日、モスクワで初めて、リュミエール兄弟の映画の上映が行われ、1898年10月26日、「エルミタージュ」劇場で、K.S.スタニスラフスキーとV.I.ネミロヴィッチ・ダンチェンコの指揮で、モスクワ芸術大衆演劇が始まりました。また、A.P.チェーホフの「かもめ」や「ワーニャ伯父さん」の戯曲の公演が行われ、ロシアの私設オペラの指揮者として、ロシアの優れた音楽家で作曲家のS.V.ラフマニノフがデビューし、F.I.シャリャピン、L.V.ソビノフ、A.V.ネジダノワ、サラ・



ベルナール、アンナ・パヴロワなどの名前がポスターに掲載されました。

第一次世界大戦や革命は、芸術の発展を妨げましたが、1920年代に再び劇場としての息吹を吹き返しました。100年の間に、A.I.ライキン、R.カルツェフとV.イリチェンコのデュオ、K.I.シュリジェンコ、L.I.ルスラノワ、L.O.ウテソフ率いるオーケストラなど、多くのスターがここで公園を行いました。「ゼルカリヌイ劇場」では、テレビ番組の録画も行われました。

現在は劇場以外にも、さまざまなイベント、フェスティバル、見本市「花の世界で」が開催されています。2014年は創立120周年にあたりますが、休息のための現代的で、おしゃれで、快適な場所に整備しながら、その時を迎えます。

動物園

動物園のことを語らずして、モスクワの公園をご案内したとは言えません。世界中のさまざまな場所に生息する動物を見るために、老若男女がこの場所に来ます。ここにいる動物やその多様さを見ながら、どれほど素晴らしい生き物と人間が共存しているのかを理解するということは、特別な感覚です。
モスクワ動物園は、1864年、ロシア皇族動物・植物気候順応学会がつくりました。当時は動物公園と呼ばれ、80種200匹の野生動物や100匹以上の愛玩動物などが飼育され、うち多くがロシアの動物でしたが、ライオン、ジャガー、サイ、オウム、アリゲーターなど、国内にはいない珍しい動物も見ることができました。
特に来場者を喜ばせたのは、ペットや鳥などの血統種の販売と飼う際のアドバイスでした。
さまざまな動物を購入し、輸送するには、とても費用がかさんだため、ここは多くの上流社会の人々から支援を受け、そういった人々の寄付で、動物や植物の気候順応のための特別な建物もつくられました。
ロシア革命後、動物園と新たな名称になったこの場所は、国の所有となり、啓蒙的、観光的業務を続けました。時間の経過とともに、敷地は拡大し、オリに入れられていた動物が飼育場に移され動物の数も増えて行きました。最近は現代的な要求に答えるために改築が行われており、ここ数年で動物の数も1000種以上、約8000頭まで増加しました。これにより、世界で6番目に種類の多い動物園になりました。毎年300万人以上の人々が訪れます。
動物園では案内ガイドが行われており、動物の世界をより深く知り、その性質や習性を理解することができるようになっています。また、ただ見学をして、写真を撮ったりすることもできますが、規則はしっかりと守らなければなりません。お子さんと一緒の場合、例え動物園慣れしていたとしても、動物園とは潜在的に危険な場所で、約束を守らないといけないことや、わからないことは大人にきかなければならないことを説明する必要があります。
オリを越えることは、絶対にやってはいけません。動物が見た目には優しくてかわいくても、自分の領域に侵入されることを嫌うため、襲ってくる可能性があるのです。また、お子さんを柵の上にのせるようなことはせず、動物が見えない場合は見えるまで待ちましょう。お子さんには、オリの中に手を入れて動物を触ろうとすることのないように教える必要があります。これらは大変に危険です。愛玩動物でも必ずしも安全というわけではありませんから、野生動物ならなおさらのことです。

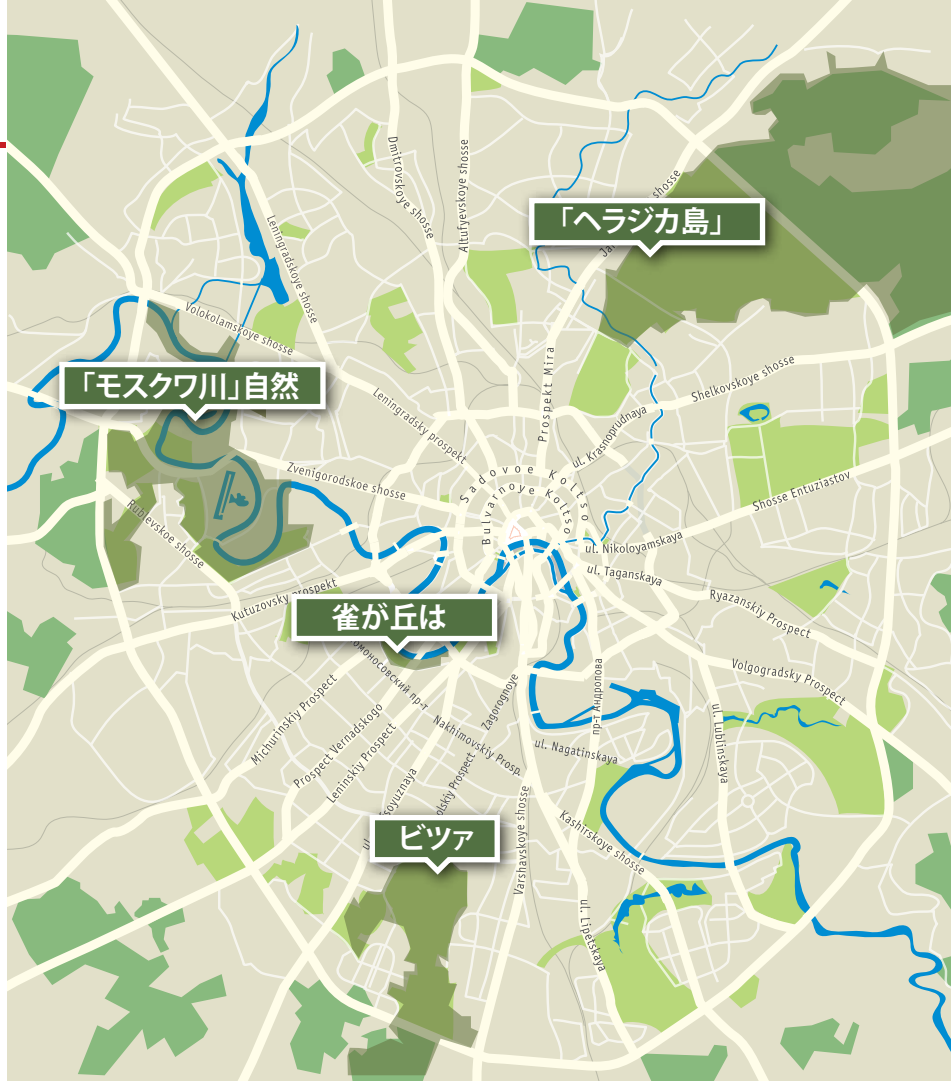
動物園内には、改修や建築が行われている工事現場が存在する場合もあるため、そのような場所に入り込まないように、お子さんから目を離さないでください。動物園は危険な場所なので、必ずお子さんと一緒にいてください。危険性は大人も子供も認識すべきことです。
また、動物を刺激したり、注意を引こうとしたり、イライラさせてはいけません。そのため、動物園で騒いだり、大きな音楽をかけたり、ペットを持ち込んだりしてはいけません。
また、動物の生命にとって危険なため、動物園の動物にはエサを与えないでください。どの動物にも、獣医が管理する、バランスの取れたエサの量というものがあり、規則正しくないエサの摂取により、動物は病気になったり死んだりしてしまいます。動物園にいる多くの動物は、ロシアの気候に慣れておらず、したがって、エサも同様です。子供は善意から、気に入った動物にお菓子をあげようとしますが、それもしないようにお子さんにご注意ください。
これらの規則を守れば、動物園はきっと楽しい場所になるはずです。モスクワっ子の中には、毎週末にここに来る人もいるほど、魅力的な場所です。動物を見ながら、何か新しいことや、自分自身について気づくことが出てくるかもしれません。

自然保護区

自然保護区というと、広大な森をイメージしますが、モスクワのような大都市で、そのような領域が存在するとは信じがたいでしょう。これらの場所の多くは、正式な意味での自然保護区には当てはまりませんが、特別な位置を占めています。珍しい種類の植物、鳥、動物を見ることができますし、自然の景色を堪能することもできます。こういった場所には利用価値があり、十分に散歩を楽しむことができます。自然を汚さないことと、この場所の調和や全体的統一を壊さないことが重要です。しばしばこのような場所には、説明書きが点々と置かれている特別な散歩コース「エコ道」があり、案内ガイドに話を聞くこともできます。

「モスクワ川」自然
歴史公園は、ストロギンスク沖積平野、セレブリャノボルスク山林区、セレブリャヌィ森林（銀松林）、クルィラツク沖積平野（カラムィシェフ河岸通り含む）、スポーツ公園、ムニョヴニコフスク沖積平野、クルィラツク丘、フィリ・クンツェフ林園（フィリョフスキー公園とスヴォロフスキー公園からなる）の自然区域を含んでいます。人工島に位置している大きな森、セレブリャヌィ森林（銀松林）のモスクワ唯一のアシ沼には、「エコ道」があります。この公園は活動的な休暇、ピクニック、子供との休息などのための施設や、ボートのレンタル、コースを走る電動自動車の観光などもあります。
ここのビーチでは、モスクワには珍しく遊泳が許可されています。

国立公園「ヘラジカ島」は、国の特別保護区です。
ここには休息やエコ観光の条件がそろっていて、道路網、ベンチ、ひさし、表示、児童遊戯場など、使いやすくなるようにインフラが整備されています。また、ヤウザ川を巡航するエコ・コースも計画されています。



自然保護区の雀が丘は、有名な展望台からモスクワ全体を見渡すことのできる、観光に適した場所で、敷地内の自然も美しいです。ここにはエコ道が3本あり、老若男女に植物や動物についてさまざまな話をしてくれる、案内ガイドもいます。

自然・歴史公園「ビツァ森林公園」には、小川、川、雨裂、長い谷などがある景勝地です。複数の種類の木々、珍しい種類の植物、リスやキジの飼育場などがあります。豊かな自然と、大昔から続く歴史のある、美しい公園です。

補足情報

国立博物館・自然公園「コロメンスコエ」
電話　8(495) 232-61-90
モスクワ市アンドロポフ大通り39
www.mgomz.ru
公園　24時間営業
博物館　日曜日〜金曜日
10:00〜18:00、
土曜日 10:00〜19:00、
休館日　月曜日
ルート、入力

イズマイロフ公園
電話　8(499) 165-12-36
モスクワ市バウマン地区2、14号館
www.mgomz.ru
公園　24時間営業
博物館　毎日10:00〜18:00、
休館日　月曜日
駐車場、輸送、入力

屋敷・公園アンサンブル「レフォルトヴォ」
電話　8(499) 261-70-20
モスクワ市クラスノカザルメンナヤ通り1
www.mgomz.ru
公園　24時間営業
博物館　毎日10:00〜18:00、
休館日　月曜日

国立歴史・建築・芸術・風景・博物館・自然公園「ツァリツィノ」
電話　8(495) 321-63-66
モスクワ市、ツァリツィノの沼岸に沿った、ヴォズドゥシュナヤ通り、バジェノフ通り、リペツク通り、シピロフ通りの間
www.tsaritsyno.net/ru/
営業時間　6:00〜24:00
駐車場、輸送、入力

ピョートル公園
モスクワ市レニングラード大通り40
公園　24時間営業

クルィラツク丘
モスクワ市、地下鉄「クルィラツコエ」駅、「モロジョジナヤ」駅、徒歩10〜15分、クルィラツク丘通り沿い
公園　24時間営業

「18世紀のクスコヴォ邸」
電話　8(495) 375-31-31
モスクワ市ユーノスチ通り2
www.kuskovo.ru
営業時間
水〜日　10:00〜18:00、
休館日　月曜日、火曜日
ルート、入力

博物館・屋敷「オスタンキノ」
電話　8(495) 683-46-45
モスクワ市オスタンキノ通り5
www.ostankino-museum.ru/ru/
営業時間　平日（水〜日）は予約団体のみの案内
休日（土、日）は12:00から17:00まで個人の来館者をまとめて見学グループとして案内
公園は20時まで営業
チケット販売は19:00まで
駐車場、輸送、入力

自然・歴史公園クジミンキ
電話　8(495) 258-45-60
モスクワ市クジミンキ通り10
www.kuzpark.ru
公園　24時間営業

博物館・屋敷「アルハンゲリスコエ」
電話　8(495) 363-13-75
モスクワの北西、クラスノゴルスキー地区、イリインスコエ通りから5キロ
www.arhangelskoe.su
公園は毎日10:00〜21:00（受付20:30まで）、
土、日、祝日は10:30〜18:00（受付17:30まで）

リュブリノ屋敷
電話　8(495) 350-15-53
モスクワ市レトニャヤ通り1/1
www.mgomz.ru
敷地は24時間オープン
ルート、入力

ゴーリキー公園
電話　8(499) 237-07-07
モスクワ市クルィムスキー・ヴァル通り9
www.park-gorkogo.com
公園　24時間営業

ソコリニキ公園
電話　8(499) 268-60-11
モスクワ市ソコリニキ通り1/1
www.park.sokolniki.com/
営業時間　毎日　8:00〜23:00

フィリ公園
電話　8 (499) 146-05-31
モスクワ市ボリシャヤ・フィリョフスカヤ通り32/3
www.park-fili.ru
営業時間　10:00〜18:00

勝利公園
電話　8 (499) 142-4911
モスクワ市お辞儀が丘フォンチェンコ兄弟通り11
www.poklonnayagora.ru
営業時間　火、水、金、土、日　10:00〜19:00
木　10:00〜20:00
休館日　月曜日と最終木曜日
駐車場、輸送、入力博物館

製品情報は変更することができます。電話で指定してください。

ロシア科学アカデミーN.V.ツィツィン大植物園
電話　8(495) 977-91-45
モスクワ市ボタニチェスカヤ通り31
www.gbsad.ru
営業時間　毎日10:00〜18:00、
休館日は月曜日と木曜日

ニエスクチヌイ庭園
電話　8(499) 237-07-07
モスクワ市レーニン大通り30
www.park-gorkogo.com
営業時間24時間

薬草園
電話　8(495) 680-67-65
モスクワ市平和大通り26、1号館
www.hortus.ru
営業時間毎日　10:00〜20:00
4月に2〜3週間閉鎖

エルミタージュ庭園
電話　8(495) 699-04-32
モスクワ市カレトヌイ・リャド通り3
www.mosgorsad.ru
営業時間月　14:00〜23:00、
火〜金　12:00〜23:00、
土〜日　10:00〜23:00

モスクワ動物園
電話　8(499) 252-35-80
モスクワ市ボリシャヤ・グルジンスカヤ通り1
www.moscowzoo.ru
月曜日以外毎日営業、
夏季　10:00〜20:00、
冬季　10:00〜17:00
ルート、入力

製品情報は変更することができます。電話で指定してください。

シンボル

- 子供のための面白いゲーム
- 美術館やモニュメント
- 軍事博物館
- 軍装備品の博物館
- 駐車場
- 公共輸送
- 警察
- バー
- 化粧室
- 地元のスケート
- スペースマリオカート
- 自転車専用道路
- スキー場のリフト